
人間界逃走の果てに

コサイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間界逃走の果てに

【Nコード】

N7112I

【作者名】

コサイン

【あらすじ】

ある日淫魔の王である父親が勝手に決めた許婚から逃れる為、ヴァンジルド・ドレイン・クリファスト、通称ヴァンは魔界から逃げ出した！

淫魔である彼は誰もが振り返る極上の容姿。勿論女性には皆放つておかない。

日々女難で苦しめられる毎日。

ヴァンは平穩な日常を手に入れる事ができるのか!?

逃走1：初めまして人間界（前書き）

気分転換に書いてみます。応援よろしくです。

逃走1：初めまして人間界

どんよりと曇った空。ここレイシア王国ではもうじき激しい雨が降るらしい。

雨が降る予定にも関わらずレイシア王国にある広場は今日も沢山の人で賑わっている。

広場の真ん中にある噴水は穏やかに水を吐き出し、その周りに置かれたベンチには子供を連れた親、手を繋いだカップル、買い物の休憩がてら広場に立ち寄ったお年寄りなど様々な人でうめ尽くされていた。

——平和な空間。そう言い表すのが適切だろう。しかし、その平和な広場の片隅ではどう見ても平和とは言い難い光景があった。

「オイオイお嬢ちゃん、そんなガキの後ろに隠れてねーでこっちは来いやあ。たーっぷり可愛がつてあげるからさあ。」

イカつい顔立ちのオッサンどもに囲まれているのは二人の少年少女だ。

少年の方はヴァンジルド・ドレイン・クリファスト、通称ヴァン。この物語の主人公である。無造作な銀髪で、事情を飲み込めてないのか目線をしきりに少女とオッサン達の間で行ったり来たりさせている。

そんな少年の背中に隠れるようにいるのは金髪をフワフワのウェーブにした少女。少し吊り上がった猫のような青い目でオッサン達を反抗的に睨んでいた。

「ハッ！誰があんたらなんかと遊ぶのよ？寝言は寝て言いなさい。」

少女の気の強さを物語るような発言に、周りを取り囲んでいたオッサンの一人が元々細い目を嬉しそうに細め歓喜する。

「ほっほう！いいねえいいねえ！オジサンはこの娘をさらに鳴かせてみたくなって来たよ。」

どうやらこの細目の男はオッサン達のリーダーらしい。細目男が他のメンバーに顎で合図すると、オッサン達は一斉に頷き少女を奪おうとヴァンに掴みかかった。

「うわっと！何なんだよ！？」

ヴァンは見事としか言い様がない体捌きで次から次へと襲いかかってくるオッサン達を受け流していた。

「ちょっと！放して！！」

少女が叫び声を上げる。ヴァンがオッサン達を相手している間に細目リーダーに捕まったようだ。

「あつ。」

「『あつ』じゃない！その銀髪っ！助けなさいよおっ！！」

少女は細目男の腕の中で暴れたがびくともしない。男と女の力の差がハッキリとしていた。

ヴァンはしょうがないなーと少女の方へ向かおうとした。

「ん？」

…気付けばヴァンもオッサン達にガッチリ押さえられている。ヴァンはただ受け流すだけで、相手は傷一つ負ってない。敵が元気な状況で余所見をすれば誰だってどうなるか予想できそうなものだが。

「兄ちゃんやつちまえー！」

「オヤジどもに負けんじゃないよ！」

「見て見て！あの人格好いーっ！」

騒ぎでいつの間にか集まった聴衆達が好き勝手な言葉を叫ぶ。

「兄ちゃんよお…連れの娘がどうなるか大人しく見てな…。」

すっかり悪者ポジションでテンションが上がった細目男は、ゲヘ…と品のない笑いを漏らしながら動けない少女の胸の膨らみをゆっくりに揉んだ。

その途端、聴衆からは怒りの声やら叫び声やらが上がる。

少女は屈辱に顔を歪ませながらも歯を食いしばり必死に耐えていた。

「おっと、反応無しか？兄ちゃんも情けね…」

声が途切れた。

ドサツ、ドサツと次々に人が倒れていく音。

聴衆や細目男、少女はただ啞然と手下のオッサン達が倒れていくのを見ていた。

ついに細目男も白目をむいて倒れ込んだ。少女を捕まえていた手が緩み、少女がふらついたがスツと現われたヴァンが支える。

——この間、僅か10秒。

ヴァンはフウツと溜め息をつくとき紅い目で気絶した細目男を見下ろした。

「この女の子は連れじゃねーよ。」

「今頃！？もつと他にセリフあるんじゃないのっ！？」

少女が突っ込んだが、聴衆達の歓喜の叫びで書き消された。

「かけー！」

「お嬢ちゃん、助かって良かったねえ！」

「どうやって倒したの？全く見えなかったよ！」

「うちの婿にー！」

「うちの養子にー！」

ヴァンはいきなりの人気に照れたように笑った。

「頼みがあんだけどいいかな？」

その言葉に、私が！僕が！と声上がる。

ヴァンは恥ずかしそうに頬を掻きながら言った。

「じゃあ、誰か人間界を案内してくれ。」

逃走2：ご馳走さん（前書き）

15Rってどこからが15Rなんだろう

逃走2：ご馳走さん

先程ヴァンに助けてもらった少女、ベルは腕を組み、向かい合わせの席で夢中になってご飯を食べている銀髪紅目の端正な顔立ちの少年を複雑な思いで見ている。

——全く、この男は！いきなり見知らぬ人達に人間界を案内しろ、なんて！

悪い人も沢山いるんだから、と溜め息をつく。

思わず溜め息をつくまでにこのヴァンと名乗る男は不用心なのだ。

確かに善意で案内しようとしている人はあの聴衆の中にいたんだろうけど！

ベルのコーヒーが注がれたコップの取っ手を握る手が強くなる。

——よりによってサングラスをかけ、袖に縄を隠し持った得体の知れない女について行こうとするなんて！

「縛り上げて何するか分かったもんじゃないわ！」

「んあ？いきなり何だ？」

しまった、声が出てしまった！とベルは焦った。

ヴァンはシチューを食べる手を止め、しばらくベルを不思議そうに眺めていたが目の前の料理の魅力に負け、再び食事を始めた。

ヴァンが興味深そうにサラダをつつくのを確認したベルはホッと息をつく、コーヒーをくいと飲んだ。

そして、それにしても妙だわ、と眉を顰める。

——『人間界』を案内してって言ったわよね。
普通の旅人なら『レイシア王国』を案内してって言うんだけど。

ベルは再びヴァンを観察し始めた。

銀髪は……まあ、いないこともない。紅目……ああ、これは見たことがない。耳は尖っているし、絶世と言っても過言じゃないくらい容姿は整っている。

ベルは自分でも馬鹿らしいと思いながらも冗談っぽく聞いてみることにした。

「あんたって人間？」

急な質問にヴァンはきょとんしながらも口を動かしていたが、ゴクンと口の中ものを飲み込むと口を開いた。

「何いってんだー？俺が人間に見えるかよ？」

そう言うなりクツクツと笑い始めるヴァン。

「何？人間じゃないなら何なのよっ！」

笑われている事が恥ずかしいのか顔が赤くなっていく。ベルはムキ

になり噛み付くように言った。

「ん？何って、淫魔？」

当たり前のような調子で当たり前ではない事を言つてのけるヴァンに軽く頭が痛くなる。

ベルはこめかみを押さえながら「正気？」としか言う事ができなかった。

疑われているのがお気に召さないのかヴァンはムツとした表情を浮かべるが、すぐに何かを企む子供のような目をした。

「見とけよ？証拠を見せてやる。」

そう言うやいなや、丁度ヴァン達が座っているテーブルに近付いて来たウエイトレスをサツと手を上げ呼んだ。

「どうされましたか？」

心配そうにヴァンの元へ駆け寄ったウエイトレスは茶髪の若い女の子だった。

ヴァンはベルに向かって「淫魔の特技その1！」と言うと、今度はウエイトレスの女の子に「この数を覚えといて」とピースをした。2を覚えてと言いたいらしい。

「一体何を…」

ベルが言いかけたが、目の前の光景に口を閉ざした。

——ヴァンがいきなりウエイトレスにキスをしたのだ。

「んっ」

しかも、普通のキスではなく舌を絡ませるキス。

「……あんった初対面の女の子に何をやってるのよっ！」

我に返ったベルは目の前の淫らな行為を止めさせようとガタンと席を立った…

「ふう〜。ご馳走さん。」

が、既に遅かったらしくヴァンは満足そうな顔で口を放した。相手のウエイトレスの女の子はぼんやりと宙を見つめている。

「あんだねえ！」

「まー見てなつて。」

ヴァンはベルをなだめると、ウエイトレスの顔の前でパンツと手を打ち鳴らした。

「はっ！私は何を…」

「お姉さん、さっきの数字覚えてる？」

ウエイトレスの女の子は「数字…ですか？」と考え込んだ後、泣きそうな顔になりながら言った。

「申し訳ございません…分かりません…」

その言葉に満足そうな顔を浮かべたヴァンは、優しく微笑んだ。

「だったらいいよ。時間取らせてごめんな？」

「いえ…こちらこそ。」

ヴァンは頬を赤く染めたウエイトレスの後ろ姿を見送りながら、ベルに勝ち誇ったような目線を向けた。

「っていうこと！」

「…つまり、記憶を消せるって言いたいのかしら？」

「そー。」

ベルはヴァンを睨んだ。

「淫魔は人を襲うって聞いたけど。」

「その為の能力だぜ？襲った記憶を消しまえば変に波風も立たないし。」

「サイテー。」

即答するヴァンに呆れた。ベルはヴァンと話せば話す程嫌いになれそうな気がした。

「じゃ、最後の質問。」

「なんなりと。」

ヴァンはまた食事を再開していた。

「何で人間界に来たの？」

「この料理うめー！」

まあ何でかって言うと、許婚から逃げて来た。
ベルは眉を吊り上げた。

「逃げて来た？許婚から？」

ヴァンがフォークでじゃがいもをグサリと刺した。

「あー。親父が勝手に決めたからムカついて家出。」

何だ、くだらない、とベルは思った。家出は魔界内でやればいいのに。

不意にヴァンの視線を感じた。

「…何よ。」

「……ベルが許婚だったら俺、家に戻るのに。」

——不意打ちだ。

ベルの頬は勝手に紅潮していく。

やだやだ。こんな最低男相応しくないのに！

「冗談でしょっ！！」

「うん。冗談。」

ヴァンはあっさりそう言って、へらつと笑った。

「あ・ん・たねえっ」

「お客様。こちら、御注文の控えになります。」

拳を握り締めたベルの前に置かれたのは一枚の紙切れ。

「何っこれ……。」

カレーライス、シチューにサラダ、パスタにピザ、ハンバーグにステーキと手当たりしだいに注文されていた。

「それ、ぜーんぶ美味かったぜ。人間界も侮れねーな？」

控えを持つ手が震えた。

これら全てこの悪魔が一人で食らい尽くしたというのか。
勿論それらの料金を払うのは人間界の金を持っているベルしかないな
かった。

「ヴァン……?」

ベルに殺意が生まれたのは言うまでもない。

逃走3：嫌な予感しかない

ピンクを基調とした可愛らしい部屋。ベッドの上にはふわふわのティンベアがグタツと寝かせられ、少々不気味な人形がタンスの上から床を見下ろすここは、ベルの家である。

「俺はこれからベルの家に住むのか？」

「そうよ。本当はものすごく嫌だけど！」

ヴァンはふーん、嫌なのかとどうしても良さそうに呟くと、興味津々でソファアのクッションをいじりだした。

——二人はレストランを出た後、ベルの家へと向かった。

理由はヴァンが街の人に迷惑をかける事をベルが恐れた為。

ヴァンは淫魔の本能からか、街を美しい女性が通ると必ず目で追っていたのだ。

（このままこいつを放置すると、絶対に人を襲う。だったらあたしが犠牲になっても家に閉じ込めよう——。）

というベルの涙ながらの決断だった。

「ベルの下着だ。」

今さっきまでクッションをいじくっていたはずのヴァンが今度は衣

類が入ったタンスを開けていた。しかも今見ている衣類は禁断の宝箱……。

「死ねええええっ!!」

ボスッ。

「何だ？襲って欲しいのかよー。」

ベルは殴りかかったはずなのにどういつ訳かヴァンの腕の中に収まっていた。

「んな訳ないでしょ!!あー、寒気が……。」

そう言いながら離れようとするがヴァンは放そうとしない。

「放せ！馬鹿っ！」

「お前、おもしれーわ。」

ヴァンはフツと笑うとベルを解放した。

「な、何なのよ？変なヤツ……。」

そう言いながら手はテキパキとタンスの引き出しを元に戻していく。

「あんたは部屋の物扱うの禁止だからね！」

ベルはタンスを元に戻し終えてヴァンの方を振り返った。

「スー…」

「自由過ぎる…。」

そこにいたのは、ソファ―に丸まって寝るヴァン。

ベルはこれからこの自分勝手自由人をどうしようかと頭を抱えるのだった。

穏やかな日曜日の午後。ただ一つ残念な事は今にも雨の降りそうな不安定な空だという事だけ。

それは富豪シュメールⅡピンの家でも同じだった。

シュメールはいつも学校の寮での生活なのだが、日曜日はこうして自宅に帰る。

こういう日はゆっくりしたいが、あいにく雨が降るといっし、いつもはいるお手伝いさんも皆休暇で実家に帰ってしまっていたので、母親から今のうちに行って来るようにとお使いを頼まれたり、洗濯物を取り込むのを手伝ったりと大変な午前中だったのだ。

しかし、午後はゆっくりできるからいいか…と窓際に置かれた肘掛け椅子に座って疲れたように目を閉じる。

あんまり強くない日差しがシュメールの長い睫毛を照らしている。シュメールはそのままコテンと眠りにつこうとしていた。しかし。

ピリリリリリリ！

無情な電子音が鳴り響く。シュメールは鬱陶しそうに顔にかかった黒髪を払いのけ、音の原因である彼女の携帯を手に取り、相手を確

認して通話ボタンを押した。

「もしもし…。」

『もしもし！シユメール？』

「なあに？ベル。珍しいですわね。」

電話の相手はベルらしい。

『相談したい事があって…。とりあえず家へ来てくれる？』

「はあ、相談したい事…ですか？」

『ええ！待ってるから！』

ピッ。

ツー、ツー、ツー。

自分の言いたい事だけを言っていきなり電話を切る。シユメールはそんなベルの行動には慣れていた。

「……………しょうがないですわね。」

一方的にベルの家へ行くように約束させられたシユメールは重い腰を上げ、親友の為に家に向かう事にした。

幸いベルの家はそう遠くない。ただシユメールが気になるのは、

「雨が降らないといいですわね。」

… 天気のことだった。

欠伸をしながらソファから起き上がったヴァンは寝る前と幾つか違う点に気付いた。

一つ目は、今にも降りそうだった雨が降り出していた事。

二つ目は、女が一人増えていた事。

黒い髪をサラサラとストレートに肩まで伸ばした彼女はベルと話し込んでいてこちらの様子に気付いていないようだった。

「決定ですわね。」

透き通ったような彼女の声でベルが頷く。

「何が決定なんだ？」

ヴァンが聞くと、二人の女性は驚いたように振り向いた。

「起きていらつしゃったんですね。私の名はシュメール。よろしく
お願いしますわ、ヴァンジルドさん。」

黒髪の女性は優雅に微笑む。

「あなた、起きてたなら言いなさいよね！？びっくりするじゃない。」

と、ベル。

全く、対照的な二人である。

「よろしく、シユメール。で、何が決定なんだ？」

シユメールとベルはその言葉に目を見交わすと、ベルがゆっくりと話し出した。

「実はね、あんたを住まわせるとか言っただけど、よく考えたらあたし、いつもこの家にいる訳じゃないの。

普段は学校の寮に住んでるんだけど、今日はたまたま帰って来ただけ。」

ヴァンはうんうんと頷いて先を促した。

「あたしがいない間あんたを一人でここに居させる訳にはいかないじゃない？そこで、あたしは考えたの。」

ベルの目が危険な輝きを放つ。

「私の案ですよ。」

紅茶を飲みながらシユメールの訂正が入った。

「そ、そうだったわね。ゴホン、シユメールは考えたの。」

ヴァンはごくりと唾を飲み込んだ。嫌な予感しかない。

「あんたには…学校に行ってもらっわ！」

ヴァンはうなだれた。

「ええー！俺学校に行くぐらいなら旅するよ。」

「ダメ！あんたのことだから旅先の色んな人に迷惑をかけるに決まってるんだから！」

あたしが目の届く所で見張つとかないと。」

ベルの言う迷惑とは、勿論ヴァンが若い女性を襲う事を指している。

「迷惑かけないぜ？記憶は消すんだからさ。」

ヴァンはグツと親指を突き出した。それに対し、シュメイルは何故か「きゃっ」と顔を赤くして手で顔を隠し、ベルはしかめっ面をした。

「記憶を消しやいいってもんじゃないの！」

とにかく、学校に行つて寮に住んでもらうから！」

「…考えさせて。」

そう言うなり、しばらく腕を組んで考え込んでいたヴァンだったが、いきなり閃いたように笑顔になった。

「しょーがねえなあ。俺も学校に行つてやるよ。」

ヴァンのいきなりの笑顔にシュメイルは小さく「素敵…」と呟くが、ベルの騙されるな！と言いたげな目線で口をつむんだ。

「あんた何か変な事考えてる？」

ベルの鋭い目付きにヴァンはたじろいだ。

「変な事じゃねーよ。ただ親父達はまさか俺が学校に行ってるなんて思い付きもしねーだろうなあと思っただけだ。」

ベルはそう言えばこいつ追われていたな、と思い出した。シュメイもベルからヴァンの話は聞いていたようで、納得したような表情を浮かべている。

「じゃ、決定ですね。私が学校の方に入学手続きを済ませておくので、ヴァンジルドさんは簡単な入学テストのみ受けてもらうことになりますわ。」

ベルは頷いたが、ヴァンは首を傾げた。

「入学テストって何だ？」

シュメイはフフ、と笑い答えた。

「魔法についての常識がいかについているかを試す知識のテストと、初級レベルの戦闘実技テストですわ。」

「魔法についての常識…？」

「ええ。例えば、魔力は体のどこあたりから作り出すのか？などの問題ですわね。」

シュメイは緩やかな動作で紅茶に口をつけた。

「答えは丹田、へその下辺りから。常識よね？」

ベルは同意を求めるようにヴァンを見る。

「は…？」

翼の付け根だろ…？」

ヴァンが意味不明な発言をした。

「はあっ？何言ってるの！？」

ベルは焦ったようにヴァンの背中を見回した。

どこにも翼らしきものは見当たらない。ヴァンは一体何をいつているのだろうか。

「ヴァンジルドさんには翼があるんですの…？」

シュメールが恐る恐る聞くと、ヴァンは頷いた。

「見てろ。」

そう言いながら、着ている黒いロングティーズシャツに手を掛け一気に脱ぐ。

ベルは露わになったヴァンの程よく鍛えられた上半身に目を奪われそうになったが、注目すべきはそこではなかった。

蝙蝠の翼のような翼が彼の背中についていたのだ。バサリと広げられた漆黒の翼は片方だけでも人間一人を包み込めそうな程大きい。

「こんな大きいものどうやって隠してたのよ？」

ベルの問い掛けに、ヴァンは得意気に翼をバサバサと動かしながら答えた。

「これは自由に消せるんだ。こうやって…」

ヴァンが目を閉じると翼は一瞬にして消えてしまった。

「消えた……。」「

「だろ？」

ヴァンは服を着ようと脱ぎ捨てたティーシャツを拾う。

それを目で追いながらシユメールは困ったように言った。

「それにしても困りましたわね。魔力の作る場所が違うとなると、他の私達の常識も人間と淫魔では違うかも知れません。」「

どこからともなくサアーッと冷たい風が三人の間を吹き抜けた。

これは深刻な自体である。テストに合格しなければ学校にも行くことは出来ない。つまり、淫魔であるヴァンをベルの監視の無い状態で世の中に野放しにするという事――。

ベルは身震いをした。

――ヴァンを野放しにですって？冗談じゃないわ！そんなことした

らヴァンの犠牲になる哀れな若い女性が続々と出てしまう！

一方、ヴァンはベルのようにショックは受けてはいなかった。

学校という隠れ蓑を作れないかもしれない事は少し残念だ、という程度である。

「シユメール！入学テストは大体いつ頃になるかしら！？」

ベルはとりあえずテストまでの日にちを把握する事にした。テストの内容は日にちがあれば受からない訳でもない簡単な知識だからだ。

「え、えっと…大体来週の日曜日になりますわね…。つまり一週間後ですね。」

「ヴァン…！」

ベルはヴァンの腕を強く握った。

「へ？うわ！いてて！な、何だよ！？」

「あたしも手伝うから……猛勉強するわよ…！」

「……………おう。」

ヴァンは溜め息をついた。テスト勉強をするくらいなら学校という隠れ蓑を作るのを諦めて、人間界を自由に旅したかった……と思ったことは内緒の話である。

逃走4…どこ行っちゃったのよ！（前書き）

急展開…なのかな？

逃走4：どこ行っちゃったのよ！

「だからっ！

最初に使われた魔法は火の魔法なのっ！何回言えば分かるわけ？」

「俺ら悪魔は水の魔法って習ったぜ！？」

「あんたら悪魔が最初に使った魔法なんて知らないわよっ！

今やってるのはに・ん・げ・んの魔法使いが最初に使った魔法なの
ー！」

「ちえー、混乱するぜ。」

時間はあっという間に過ぎてテストは明日へと迫っていた。

ベルは学校があるのだが、ヴァンのテストを優先して学校を休むと
いう気合いの入れようだ。

「なあ、結構覚えたからご褒美に外出ちゃダメかー？」

ヴァンはこの六日間ベルの家に缶詰だった。ヴァンの勉強を見ている
ベルもそれは同じなのだが。

「…外に出て何する気？」

ベルはヴァンを睨んだ。ヴァンはそんなベルの顎を人差し指でクイ
ツと持ち上げる。

「言わなくても分かるだろ？淫魔としての活動だ。」

ヴァンはベルを色気をはらんだ目付きで見つめたが、あっさりベルはヴァンの手を「邪魔」と払うと、勉強道具を広げたテーブルに頬杖をついた。

「今は勉強の方が先よ。あたしがわざわざ学校まで休んでやってんだから。」

「えー！！少しでも！外に出ても何もしないって約束するから！」

「……まあ、外の空気を吸うくらいなら……。」

「よっしゃー！！サンキューなベル！」

「あーちよっとっ！」

有り得ないスピードで家を出て行くヴァン。
ポツーンと取り残されたベルは「待ちなさいよっ！」と慌てて後を追うのだった。

すっかり夜になったレイシア王国は家という家の窓から溢れだす光で綺麗なイルミネーションになっていた。

街には所々外国からやってきた『桜』という品種の樹が植えられており、丁度この春の季節に見頃を迎える。桜が家の明かりに照らされた様子を見に来た人々で街は賑わっていた。

そんな中にヴァンはいた。ベルとの約束を破るつもりはこれっぽつ

ちもなく、ただ外の空気を吸いに来ただけのようだ。

「痛いよぉー！うわーん！」

見ると、人込みから離れた路地で女の子が泣いている。ヴァンは悪魔らしく放っておこうかと思ったが、どうしても気になった。

——俺は悪魔らしくない悪魔だなあ。

そつばやきながら仕方なく女の子に近付いた。

「どうしたあ？」

「うつく、ひつく……うわーん！」

まだ五歳くらいの女の子は顔を上げてヴァンの顔を見ると、一層激しく泣き出した。失礼な子供である。

「えつとお…落ち着け、俺は何もしないから。」

泣きやまないどころか激しくなった女の子の声にヴァンは慌てた。

「うわぁん！うわぁん！」

「よ、よーしよし。」

ヴァンは油断していた。それ故に気付けなかった。危険が彼の真後ろに迫って来ている事に。

——ヴァンの背後で何者かが呟く低い声がした。

「――何者だ!？」

人間より数倍早い反応で気付き、振り向いたヴァンだったが事は手遅れ。

「……………!!」

音もなく発せられた呪文は成す術もなくヴァンを貫いた。

重力に従い、地面に倒れるヴァンだったが辛うじて意識はあった。

ヴァンが倒れたのを見計らったかのように黒服の男?が女の子に近付き声をかける。

「見事な演技だった、アリア。」

アリアと呼ばれた人物はさっきまで泣いていた女の子だった。アリアは先程とは打って変わって無表情を顔に貼り付け、当たり前だと言うように頷いた。

――この女の子と呪文をかけた奴は仲間!?!あーあ…俺、油断しち…まった…。

そこでヴァンの意識は、途切れた。

「まったく!あいつどこ行っちゃったのよ?」

ズンズンと足音も荒く歩く、フワフワの金髪を靡かせる少女。夜のうつすらライトアップされた桜を見る為に集まった上機嫌な花見客でこった返す中、こうも不機嫌そうな表情で歩くのはどこを探したって彼女だけだろう。

——そんなに時間が経ってないからそこまで遠くへはいってないはず……いや、ヴァンの事だから短時間でも遠くへは行けるに違いない。

ベルは深い溜め息をつくと行く人行く人の顔を見ていった。

街行く人の顔をいちいち確かめなくても相手がヴァンではないことはベルも十分に分かっていた。悔しいが、ヴァンはオーラが普通の人とは違い過ぎるのだ。

ドンッ！

「あっ！ごめんね！」

ベルが余所見をして歩いていたせいで幼い女の子にぶつかり、相手の女の子はぶつかった衝撃で地面に尻餅をついてしまった。

手を差し延べて女の子が立ち上がるのを手伝おうとするベルだったが、差し延べられた手に気付かなかったのか。

そこは謎だが、女の子は自分で立ち上がるとスタスタと何処かへ行ってしまった。

「行っちゃった……」

四、五歳くらいかなあ。迷子だったのかしら？」

それにしても、とベルは思う。

「表情が無かったわね…。」

逃走5：動かねえ（前書き）

感想とか貰えたらすっごく嬉しいです。え、要求してる？違う違う。独り言です。

逃走5：動かねえ

「——で、結局ヴァンジルドさんは戻って来なかったという訳ですね？」

「……はい。」

今日はヴァンの試験の日。ベルは日が昇るまでヴァンを探し回ったのだが、ヴァンを見つけることは出来なかった。途方にくれたベルは早朝にも関わらずシュメールに電話をかけ、今すぐ来るよう頼んだのだ。

「手掛かりがない以上、こちらとしては非常に残念ですが…闇雲に探すしかありませんわね。」

そう言ってシュメールは悲しそうに目を伏せた。

「あの馬鹿！今日はテストだっていうのに…。」

「まあまあ、落ち着いて。…もしかしたらヴァンジルドさんの身に何かあったのかもしれないわ。私は従者達にレイシア王国を隅から隅まで探すよう命じますから、ベルはお休みなさい。酷いクマですわよ？」

さすが富豪としか言い様がない発言である。ベルは首を横に振った。

「お言葉に甘えたい所だけど、あたしはまだ寝ない。シュメールの従者さんたちと手分けして探すわ。」

「……分かりましたわ、お氣をつけて。私は学園長にテストに来なかった場合の処置について祖父やと聞いて参ります。」

シユメールは部屋を出る前に一度心配そうにベルを振り返った。ベルが「大丈夫だから」と手を振ると、「何かあつたら連絡するんですよ」と念を押した後ようやく満足したのか部屋を出て行った。

シユメールの従者達はすぐにやって来た。人数は30人程。ベルの部屋に30人は窮屈過ぎたので、家の外でそれぞれの探す場所を割り振ることにした。

ベルに割り振られたのはA番地。広くもないが、狭くもない中途半端な地域である。

「皆さん、只今の時間は6時30分です。10時30分のテストまでに見つからない場合はシユメールお嬢様、こちらにいらっしゃるベルお嬢様に連絡をしてください。」

「了解！」

従者の中のリーダーらしき男が呼び掛けると皆一斉に頷いた。（ベルだけはそんな従者の団結を前にどうすればいいか分からずにたじたじではあつたが。）

「それでは、解散！」

先程の男が高らかに告げると従者たちはそれぞれの担当の場所へバタバタと慌だしく駆けて行く。

「あ、あたしも行かなきゃ！」

数秒遅れてベルも負けじと走り出すのであった。

——暖かい。ここは、何処だ……？

ゆっくり目を開け、今自分が置かれている状況を確認してみる。

見覚えのないベット、テーブル、クローゼット、その他諸々。

全て女の子らしく白で統一されているが、同じ女の子らしい部屋であるベルの部屋とは似ても似つかない。

——部屋の主は今この部屋にはいないらしい。

ちなみに暖かいのはベットに寝かされているからのようだ。

ヴァンは起き上がろうと腹筋に力を入れようとした。

「あれ……？動かねえ……。」

おかしい、そんなはずはない、と今度は手を使って起き上がろうとしたが手自体がオモリになったかのように動かない。

「うそーん。まじすか。」

こんな状況にも関わらず緊張感のない言葉遣いなのは彼の悪い癖なのだろうか。

「あら、目が覚めたのねン。」

どこからともなく現われたのはフリフリの真っ白なワンピースを着た、見たところ三十歳は超えているであろう女性。

彼女はいそいそとヴァンが寝ているベットに座り、クルクルに巻かれた茶色の髪を耳にかけながらにつこりと笑いかけてきた。

「アタシの事覚えてるン？」

「あ…？」

この匂いには嗅ぎ覚えがあった。人間ではないヴァンは鼻が利く。もし人の顔を忘れていても匂いだけはしばらく覚えているのだ。

「最近会ったんだろーけどお前の顔は忘れた。」

ベットに寝た状態のままヴァンは正直に答えた。

「あらあン！正直な子ねン！………こうしても思い出さないかしらん？」

彼女はサングラスを装着し、手で少しそれを下げて期待するような目でヴァンを見つめたが、

「えー？分かんねえよお。」

と、ヴァンにスイマセン、と言いたげな顔をされただけで終わった。

——もしこの場にベルがいたならば「あーっ！ヴァンに人間界を案内するとか言いながら袖に縄を隠し持っていた謎のサングラス女！」と非常に長い名前で彼女を呼び、大騒ぎする事だろう…。

謎の女は「大丈夫。アタシ挫けない」と激しく首を振り、ヴァンに
向き直った。――立ち直り完了らしい。

「まあいいわん。アタシの事はこれからゆっくり教えてあげればい
いんだものん。」

「えっ？今何て…」

「今日からあなたはアタシのペットってことよん。」

そう言うや、十七歳のヴァンにのっしとのし掛かる謎の女、推定年
齢三十歳。

「ペットってどういう事だよ？俺今日テストあるから帰してもらわ
ないと困るんだよね。」

「こんな状況なのに余裕だわねん？慣れてるのかしらん？ペットな
のに生意気ねん。」

「生意気も糞もあるかつ。俺・は・テ・ス・トな・ん・だ・よっ！」

「あなた、さては魔術学園に通ってるのかしらん？制服姿……興味
深いわねん。」

謎の女はベロンとヴァンの頬を舐めた。

「あーっもう！制服姿かなんだか知らねーけど、その可能性を潰し
てんのはお前だっつーの！」

謎の女は茶色の目を大きく見開いた。

「…………『お前』？いけない子ねン。お仕置としてこれからずっとアタシを『ダルビン様』と呼びなさい！そしてアタシに服を脱がされなさい！」

——もう嫌だ。ヴァンは思った。淫魔の俺が逆に襲われるなんて恥だ。恥過ぎる。屈辱だ。

そんな事を思っている間にも、ヴァンのティーシャツはダルビンと名乗る女によって成す術もなく脱がされてしまった。

「キヤア！素晴らしいわん！」

そのままダルビンの手がヴァンのズボンへと掛かる…

「ちょっと待ったあ！！！」

が、危ないところでヴァンの待ったが入った。

「なあにようつ？」

ダルビンは少し不機嫌そうに顔をしかめるがすぐにヴァンの提案によって目を輝かせる事になる。

「キス…しねえか？」

逃走6：なんでも屋（前書き）

なんか…テスト受けるまでが長いな…

逃走6：なんでも屋

ベルは走っていた。時間を無駄にしたくないというのもあるが、何よりA番地が予想以上に広がったのだ。

（もう！早く出てきなさいよっ！）

ある程度走っては立ち止まって辺りをキョロキョロ見回す。気付けばベルはそんな動作を繰り返していた。

探すのを再会してから一時間経つが、シユメールの従者達から一向に見つかったぞという連絡が来ない。今頃、従者の皆もベルと同じく、なかなか見つからないヴァンに対して焦りを感じているだろう。

——あれは……！

ベルの目に飛び込んで来たのは『なんでも屋』探し物から人殺しまで！』というノーマルな事から危ない事まで書かれている古ぼけた看板。

「探し物……。」

ヴァンの顔が浮かんだ。

もしかしたら『なんでも屋』に頼めばあっさり見つかるかも知れない。

「おおおや、お嬢ちゃん『なんでも屋』に御用かね？」

「きゃ！」

看板をまじまじと見つめていたせいか、目の前の老婆に気が付かなかった。

老婆は齒の抜けた口をにいつと歪ませ笑う。

「ひっひっひ！」

驚かせてしまったねえ。まあお入りよ、依頼の手続きは中でね。」

「え……と。」

どうしようか。何だか断り辛い雰囲気である。そうしている間にも老婆は有無を言わさぬ力でベルを『なんでも屋』の中へ引つ張り込んでしまった。

『なんでも屋』中は外から見たのとは違い、綺麗な内装だ。

血のように真っ赤なソファ、部屋の所々に飾られた骸骨がベルにとってマイナスだが。

「そのソファに座って待つときな。アタシはお茶を入れて来るよ。」

老婆はそう言い、のそのそと部屋を出て行った。ベルはしばらくソファを見つめていたが、えいつと座り老婆を待つ事にした。

ベルが座って数秒もしないうちに、おぼんにお茶を二つ乗せて老婆

が戻って来る。

「待たせたね。」

さあ、お嬢ちゃんの依頼を聞こうか…そう固くならんでよろしい。」

老婆はおぼんをベルの前のテーブルに置くと、自分はドカツとテーブルの余りのスペースに座った。その拍子にテーブルが揺れてその上に乗っているコップのお茶が零れたが老婆は気にしないようだ。

「あの…あたしお金が…」

申し訳なさそうに手持ちがない事を告げると、老婆はアタシは気にしないよと手を振った。

「アタシが貰うのは物さあ…。無かったら取りに行って貰うだけさね。」

「はあ…。」

何やら大変な事になりそうだとベルは思う。そういうのは大抵なかなか手に入らない物だったりするのだ。

——もう、ここまで来てしまったからには後戻りは出来ない。どうにでもなれ、よ！

「実は、ヴァンジルド・ドレイン・クリファストという人を探している」

「ヴァンジルドだ！？あの子が人間界に来ているのかい！？」

ベルは老婆の様子に目を見開いた。ヴァンを知っているのだろうか。老婆は興奮した、それでいて慌てた様子でテーブルから立ち上がり、と部屋の中をブツブツ呟きながら行ったり来たりしている。

時折「許婚」やら「淫魔王」やら聞こえるがハッキリとは聞き取る事が出来なかった。

「それで、アンタはヴァンを探している、それでいいんだね？」

今は仕事なんだと思い出したのか唐突に聞いてきた。

「そ、そうです。」

「よし、今すぐ探そうかね。
物は後払って事でいいよ。」

そう言うなり部屋の奥に引込んだかと思うと、次の瞬間には両手に埃をかぶった大きな水晶玉を持ってえっちらおっちらやって来ていた。

「ハア〜どっこいしょ。」

ドンツとテーブルに水晶玉が置かれ、またもお茶が暴れる。……
コップの回りはビショビショで悲惨な状態である。

ヴィン…！

老婆が水晶玉に手を翳すと透明な水晶玉に光が灯った。学校でも水晶玉を扱う人を見た事がなかったので思わず目を奪われる。（一年

生の間は水晶玉を使う授業が無いのだ。)

水晶玉に映し出された街の様子が飛ぶように流れて行く。早送りの映像を見ているようだ。

映像はいきなりある場所で止まった。そこに映し出されたのは…

「っ！

何やってんのよあんの馬鹿ーっ！！！」

ベットの上でヴァンと女が濃厚な口付けをしているところだった。今のヴァンは上半身裸の状態で女に馬乗りされていた。若干辛そうな顔をしているが、特に抵抗もせずに何度も何度も角度を変えて迫る女のキスを受け入れている。

——実際、抵抗せずに受け入れている訳では無く抵抗出来ないからなのだが、誤解されるのには十分だった。

「場所を…教えてください。」

ユラリと立ち上がるベル。

「おや、あちらは取り込み中のようだけど…行くのかい？」

ベルはコクリと頷いた。

「あいつを……殺しに行く……。」

おかしい。ヴァンは口付けされながら顔をしかめた。

（全く精気が吸えねえ！）

——ヴァン達淫魔にはキスの種類が三つある。

一つはヴァンがベルの前で披露した記憶を奪うキス。

もう一つは精気を奪うキス。（このキスは特別で淫魔が男ならば女、淫魔が女ならば男相手でないと成功しない。）

そして最後は愛情のキスだ。

ヴァンはダルビンの精気を吸うことで力を得、体の麻痺を吹っ飛ばそうとしているのだが、どうもうまくいかない。

「ふっ」

息が漏れた。

ダルビンの舌が口内でのたうち回っている。

唐突にヴァンは気付いた。

（そうか！こいつは、ダルビンは…）

ダルビンの口が離れた瞬間ヴァンは絶叫した。

「お前！！」

男、だろっ！！！！」

男呼ばわりされたダルビンは否定するのかと思いきや、口を尖らせて肯定した。

「そうだけドン？心は女、身体は男だけと何かン？」

「何かン?.....じゃねえ!俺は男とする趣味はねえよっ!」

「フフン、これから毎日する事になるのよん？」

「まあ、気付かれたのならもういいわん。」

バサリと豪快に白いワンピースを脱ぐダルビン。脱いだワンピースをベットのしたにバサリと置くと、恥ずかしそうにヴァンを見つめた。

「ダルビンの今の姿は女の子用のパンツ一枚だけ装着している状態だ。」

やはり胸は……見事にツルペタだった。

ダルビンはヴァンのズボンに手を掛けて叫んだ。

「これから本番よおおおん!!!」

「ぎゃああああああ！……！！！！！！！」

ヴァンの叫び……ではなかった。

ダルビンの手がズボンに手を掛けたまま固まる。ヴァンはホッと息をついた。

「今叫んだのは誰なのン!？」

見ると、部屋のドアの前で立ちすくんでいる少女が一人。

「ベル……!？」

ベルはショックを受け、うわ言のように「男同士で……」と呟いていた。

「ベル!ベル!

聞いてくれ!俺はこんなの趣味じゃねえ!」

「ヴァン…嘘でしょう?。」

すっかり生気のなくなった目でヴァンを見つめ返すベル。明らかに信じていない。

「ほんとほんと!

だから助けて!？」

「そうはさせないわよン!!??。」

邪魔が入った。

ダルビンが敵意のみなぎった目でギラギラとベルを睨む。

「いきなり現われた小娘!ヴァンを懸けてアタシと勝負しなさいン!？」

「勝負……」

ベルの目に光が灯った。

「へえ、あんたあたしに勝負を挑もつての…!？」

いきなり勃発する女と男女の戦い。

ヴァンは二人がキイン！と金属音を響かせ衝突する様子を見て思った。

（最悪だ。これ長引いたら本当にテスト間に合わねえよ…）

俺の身体はまだ動かねえのか？と指を試しに動かしてみる。

ピクッ

（やったあ!？

少し動かしにくいけど動ける!）

ヴァンは二人が戦いに夢中になっている間にチャンスとばかりに逃げ出した。

部屋を出る間際に見た物は、ベルがダルビンにアップパーを食らわしている所だった…。

逃走7：いつの間に（前書き）

ふう〜やっと話が済みそう

逃走7：いつの間に

只今午後2時15分。

無事ダルビンから逃げ出し、テストを終えたヴァンはシュメールの家の客室でシュメールと優雅に紅茶を啜っていた。

外からはさんさんと日が射し、客室の窓の白いカーテンがフワフワと風を取り込んでいる。

「美味しいですわね…。」

「そおだなー。」

「テスト間に合って良かったですわ。てつきり間に合わないかところらは冷や冷やしていたのですわよ?」

「ははっ、すまんすまん。」

シュメールは拗ねたように口を尖らせ、上目遣いになった。

「それにしてもヴァンジルドさんを襲う族やからがいるなんて許せませんわ。私がその場にいれば即刻排除してやりましたのに。」

「まあ、あのオカマはベルがなんとかしてくれてるだろ。俺があの時麻痺してなければズタズタにしてやれたんだがな。」

「ベルもその場にいたのですか？」

ヴァンジルドさんだけ戻って来たからベルとは会わなかったのかと……。」

バンッ！

客室の扉が荒々しく開けられた。噂をすれば……

「ヴァ〜〜ン〜〜？」

ベルだった。身体中に青痣を付け満身創痍といった状態で立っている。

「あんたよくもあたし一人に戦わせて自分だけ逃げたわねえ……？」

「そうだった？」

ヴァンはわざとらしくとぼけた。反省する気は毛頭無いらしい。

「とぼけないで……？」

あんたがあたし一人にあんな変態任せるせいで見てよこの痣！

ダルビンだか何だか知らないけど、あたしにやられるうちに急にDMに変化して！

もういいかなって攻撃止める度に『もっとやってン〜』とか気色悪い声で攻撃して来たのよ！？」

セリフが長過ぎたのかゼーゼーと息をするベル。

「おつかれちゃん。紅茶、飲むか？」

ヴァンは飲んでいた紅茶を差し出した。ベルはそれを無言で奪うとゴツゴツと豪快に飲み干す。——どうやらヴァンとの間接キスだから嫌！など言ってられない程喉が渴いていたらしい。

ベルは飲み干すと口を拭った。

「……ふつ、とにかくあんたを殺さなければ気が済まないわ……死になさい？」

いかにも魔法使いです、という感じの長い杖を空中から取り出し構えた。その動きに合わせ杖の先に付いている赤い宝石がボウツと輝く。

「待ちなさいベル！大体の事情は分かりました！ヴァンジルドさんは悪くないですわ！」

シユメールはサツとヴァンを守るように飛び出すと、両手を広げた。

「ベルよりもテストの方が大事だった、ただそれだけの事ですわ！」

その言葉にベルはたじろいだ。

「なっ……！そんな事な……って頷くなそこおっ……！」

見ると、シユメールの言葉にうんうんと頷くヴァン。

「シユメールの言う通り事実だ、諦める。」

「諦めるべきですわよ、ベル。」

「~~~~~っ！」

二人とも……………大っ嫌い！」

ベルはバタバタと屋敷を出て行ってしまった。

「…大っ嫌いとか言われたな。シュメール、お前ら親友だろ？いいのか？」

何事もなかったように再びティータイムを始める二人。シュメールはにっこり笑って答えた。

「いいのですわ。これからの恋のライバルになるであろう相手は今のうちに叩きのめしておかなければ！」

「??？」

ならいいけどよー。」

コンコンコン。

ベルが出て行ったばかりの扉がノックされた。

「入っていいですよ。」

部屋に入ってきたのはスーツの似合う白髪のお爺さん。彼はきちんと一礼すると柔らかな物腰で話し出した。

「お寛ぎの所、失礼します。ヴァンジルド様の学校の荷物の準備が

整いました。」

「学校の荷物…？」

ヴァンは首を傾げた。意味が分からない。まだテストに合格もしてないのに？

「ありがとう、祖父や。下がっていいですね。」

祖父やはまた一礼すると静かに部屋を去った。非常によく出来た祖父やである。

「なあ、学校の荷物って何だ？俺まだ受かって無いぜ？」

「ふふ、何言っているのですヴァンジルドさん？ちゃんど学園に合格した証のバッチを付けてるじゃないですか。」

「は…？」

……なるほど。

ヴァンの टीーシャツの左胸にはしっかりとバッチが付いていた。杖と剣が交差したデザインでキラキラと金色に輝いている。

「……いつ付けられたんだ？」

「実は試験会場だった場所には魔方阵が描かれているのですわ。その魔方阵は審査員が合格だと判断すると、気付かれないよう密かに合格者の左胸にバッチを付けるのです。」

気付かれないようにするのは学園側の遊び心で、受験者が家に帰っ

て鏡を見てびつくり！——というのを期待してるのですわ、とシュメールは笑顔で語った。

「遊び心ねえ…まーいいや。」

ヴァンはクリクリとバッチをいじっている。

「学園に行く準備してくれてありがとな。」

そう言つて笑いかけた。

ボンツ！

シュメールは耳まで真っ赤になってしまった。

「いいえー。どうせ日曜日で暇ですし、——ヴァンジルドさんのお役に立てれば私は幸せでございます。」

「ん？」

最後何て言つた？」

「あ、あ、明日から学園に通うからちゃんと起きるよつに！と言つたんですわ！そうですとも！

明日から学園に…」

「二度言わんでいい。」

……つか、明日から、なのか……？」

何で俺だけ聞いてない事ばっかなんだ、とヴァンがうなだれるのは当然であった。

逃走8：ピューン！（前書き）

こんにちはこんばんは！皆さんいかが
お過ごしでしょうか！

逃走8：ビューン！

鏡に姿を写してみた。鏡に写し出されたヴァンは黒いブレザーに黒いズボン、唯一黒くない所はブレザーの下に着たカッターシャツと赤いネクタイという格好だ。

「今日からこれ着るのか。」

しみじみ呟く。

ここはシュメールの屋敷。昨日ベルを怒らせてしまったのでシュメールに言われるままに屋敷の空き部屋に泊まったのだ。

コンコンという控え目なノックと共に部屋のドアが開いてシュメールが入って来た。

「あら！！」

お似合いですわ！！

とてつもなく格好いいです！！」

シュメールも制服に着替えを済ませていたようだ。女子の制服は男子とは真逆でネクタイ以外全部白で統一されていた。白いブレザー、白いヒラヒラの短いスカートに赤いネクタイが栄えて見える。男女共通しているのは左胸に付けた黄金のバッチとネクタイくらいだろ
うか。

「ふーん、シュメールも制服似合うじゃねえか。」

ハッキリ言って、シュメイルは巨乳だ。豊かな胸がブレザーを押し上げ、何かとエロい。それがヴァンの男であり淫魔である本能をくすぐった。

「に、似合っつて…エッチ！どこ見てるんですのっ。」

「胸、だけど？」

「あんっ！やあっ…ん！」

左手をシュメイルの背中に回し、右手で胸をゆっくり揉みしだく。

シュメイルは恥ずかしさと気持ち良さが入り交り、顔を真っ赤に染めた。

「すげー！Eだな。
精気貰ってもいい？」

「せ、精気ですの？」

んっ！

ヴァンはシュメイルの返事を待たずに口付けする。

チュク、チュク、チュク…

いやらしい音が続く。その間もヴァンはシュメイルの胸を揉み続けた。

「……ふう！」

お疲れ！わりいなシュメール。
最近女に触れてないわ、女と見せかけて男だったわで色々溜まってるんだ。

……シュメール？」

長年箱入りで大切に育てられてきたシュメールには刺激が強過ぎたらしく、ヴァンのキスの嵐が終わるや床にへたりこんでしまった。

もっとも、ヴァンが精気を奪ったせいでもあるのだが。

只今午前7時30分。ベルは早々と学園にいた。一週間ぶりの学園なので授業の遅れが心配だったのだ。遅刻が8時30分なので1時間程皆より早い。こんな時間にはベル以外誰もいないと思いきや……

「ベル！

ノート必要だろ？貸すよ。」

……いた。

机に座り、現代魔法の授業ノートを整理していると黒髪の少年が話しかけてきた。

彼の名はフィリップ。ベルに何かと気を配る好青年である。

「ええ、ありがとう……

助かるわフィリップ。」

そう言ってフィリップのノートを受け取るベル。

フィリップは「当然の事だよ」と笑い、ベルの横の席に座り彼女に体を向けた。

「ねえベル。

どうして学校来なかったの？

あついや、話したくなければいいんだ。」

「んー、そうねえ…。」

本当の事を話すべきなのか。フィリップにはいつもお世話になって
いるし……。

しかし男の淫魔につきつきりで勉強を教えていたと言えはどうなる
だろうか。そして家に泊めていたとなればフィリップは、いや、普
通の人はどんな反応を示すだろうか？

——恐ろしい。

ベルは身震いをした。

ベルの人間性が疑われるに決まっている。

相手が人間ならまだしも、ベルは悪魔を泊めていたのだ。例えヴァ
ンが悪魔のイメージ通りの悪魔でなかったとしても、そんなこと他
人は知るはずもない。

「……親戚の人が泊まりに来てただけど、その人が熱出して学校
に行くに行けなかったのよ。」

結局無難な答えで済ませることにした。

「そうなんだ…大変だったね。親戚の人はもう大丈夫なの？」

フィリップは心底共感したような顔をした。その時ベルの良心がチクリと痛んだが必死に気付かないふりをする。

「ええ！大丈夫よ。」

優しいのね。」

「そそそんなことないよ！」

「？」

顔真っ赤よ。保健室行く？」

ベルは意外に鈍感なのであった。

「それより、知ってる？」

フィリップがいきなり話を変えた。

「何を？」

話している間もベルの手は忙しくノートを写すのを忘れない。

「今日転入生が来るんだって！唐突だよね？」

「ああ…。」

そのことが。ベルは気付かれないように溜め息をつく。

——最後にあいつを見た時胸にバッチ付いてた事からして転入生は

恐らく。

「ベル知ってたんだ！？残念だなあ。朝一で仕入れた情報なのに。」

「ふふ、何かごめんね。」

「悔しいなあ。まあベルだからいいや。」

そんな感じでフィリップとベルが暫く会話をしているとクラスの人がどんどん登校して来た。

ベルは腕時計を覗き込む。

「だいぶ話し込んだみたいね。」

時刻は8時24分。

分針がピツと8時25分を指し示した丁度その時、シュメールが教室に入って来る様子が見えた。

シュメールは何かあったのか、素晴らしく上機嫌な様子で鼻歌なんか歌っている。そんな様子は何故かベルを苛立たせた。

「おはようございますわベル、フィリップ。」

そんなベルの気持ちを知ってか知らずか、ドサリと荷物を置くとシュメールは椅子を引きつつ、にこやかに挨拶する。

「おはよう、シュメール。機嫌いいね。」

フィリップは挨拶を返したが、ベルは返さなかった。まだ昨日の出来事を忘れてはいないのだ。

「分かります？

朝から刺激的な体験をさせていただきましたわ。」

うつとりと夢見るような表情になるシュメール。

「刺激的な体験？

ピリ辛の朝ご飯でも食べたのかな。」

フィリップはヒソツとベルに耳打ちする。

「……………」

しかし、ベルはその刺激的な体験の正体が何となく分かっていた。

（最低男！とうとうシュメールに手を出したのね！

…あーイライラする！とにかく何かに当たりたい気分だわ！）

一方、ヴァンは職員室でこれからの説明を聞いていた。

相手の教師はダンディな40越えの先生で、ボタン二個開けのカッターシャツから覗く胸毛もまたダンディだ。

「——であるからしてー、これが寮の部屋の鍵と生徒証を兼ねたプレスレットだ。ほれ、ビューン！」

効果音付きで投げられたソレは、シリコンで出来た赤いブレスレットだった。

「どうやって鍵やら生徒証やらになるのかとか詳しい事は聞いてくれるなよ？俺だって分からんのだし。ハイちゅどーん！」

この先生は効果音を付けるのが好きらしい。
ちなみに今のは自爆した音と見た。

「そんじゃクリファストのクラスはっと。A B C D E F G Hどのクラスがいい？
ちゃっちゃと決めちまえよ？ホームルーム始まるからな。

チクタクチクタク……」
「テキトーだな。」

ダンディが口で言う時間制限の音を聞きながら、ヴァンは吹き出す。

「ま、行くクラスはぶっちゃけ何でもいいから一番最初の…

Aクラスで！」

Aクラスに決めるとダンディは目を輝かせ、手を差し出した。

「パンパカパーン！
おめでとう！
俺の受け持つクラスだ！俺の名はアーサー！
よろしくな？」

ヴァンが差し出された手を軽く握るとブンブン振り回す。

「いていていてーよ！」

ホームルーム始まるんだろっ！？行かなくていいーのかよっ？」

「しまったー！」

今からドビュンと向かうぞー！いいか？ドビュンとだっ！」

ドビュン！

アーサーはヴァンの腕を掴むや他の男性教職員のカツラを吹っ飛ばしながら風のような早さで走った。

まさしく風。階段、廊下、また階段が過ぎ去って行く。

「キキイッ！」

とうちゃーく！

ギリギリ5秒前ー！」

キンコーンカーンコーン。計ったようにチャイムが鳴る。

「…ほうらな？」

じゃ、お前は俺が合図したら入って自己紹介してくれ。」

アーサーは最後にウィンクを「バチイッ」と決めると教室に入って行った。

扉が閉められ、孤立した気分になる。ホームルーム中に廊下に出ている生徒など廊下で待たされる転入生のヴァンだけだった。

「……。」

ふと中の様子が気になり、耳を澄ます。

「魔法か…。」

教室には防音の魔法がかけられているようだ。ヴァンは、授業中に教師がただでかい声出しても他のクラスに迷惑かけないようにする為の配慮だろうなと勝手に決め付けた。

やる事もなくなったヴァンは辺りを見回し、ポツリと漏らす。

「変な所だな。」

——ヴァンがそう言うのも無理はなかった。

ここは学園という言葉が似合わない。どちらかというと王宮である。

「うわ！『1-A』ってぶら下がってる表札にも細かい模様が彫られてるじゃねーか！どんだけ金持ちなんだあ！？」

「金ならたつくさーん持つてるぞ。学園長がな。」

「アーサー！！」

何で来た？

合図するとか言ってたじゃねえか。」

アーサーが戻ってきていた。彼は「ポリポリ」と頭を掻くと恥ずかしそうに言った。

「合図って言っても肝心の合図どうするか決めてなかったな、と。」

「…………いや、決めなくても手招きとかでいい。」

「ガーン！」

それはとりあえず置いといて、教室へ入ろうか。皆が目茶苦茶楽しみにしてるぞ。」

「あー。」

教室に入るアーサーに続いてヴァンはヒョイッと顔を出し「キャアアアアーーーーーッッ!!!!!!!!!!!!!!」

途端、女子の叫び声が爆発した。

「な、何だあ！？（耳がいてー！）」

アーサーが指で耳に栓をしながら声を振り絞る。

「負けるなクリファスト！自己紹介に移れ！」

女子達が顔を見合わせキャーキャー言っているそんな状況で自己紹介しても声が通る訳がない。ヴァンは溜め息をついた。……女子とは打って変わって男子は恐ろしく静かなのがせめてもの救いか。

「えー、ゴホン。」

——シーン。

（あ、アレ？
俺何か変な事した？

……まあいいか。）

——この時のヴァンには女子がヴァンの自己紹介を一言一句逃すまいと耳をそばだてていた事に気付く余裕など無かった。

ヴァンはチョークを手に取り、名前を書き出す。
カカカカッ。

「よし！

俺の名前はヴァンジルド・ドレイン・クリファスト通称ヴァンだ。

好きな食べ物はい…カレーライス！

嫌いな食べ物はない！

得意な魔法の属性は闇だ。よろしくなっ！」

最後に愛想良く笑う。

ブシュー！

何人かの女子は鼻血を出し、そうでない女子はふにやふにやと力が抜け机にへばり付いてしまった。

「アーサー！

大丈夫なのかアレ！？」

慌てるヴァンだったが、アーサーの呆れたような顔に口をつむんだ。

「シューっと落ち着けクリファスト。

女子のブシュー！（鼻血）は問題ない。

今気にするべきはお前の席だ。お前は一番前の窓際の席になっている。

ハイGO！」

「……りょーかい。」

席につくと机に伏せたヴァンは――。

（このクラス訳分かんねー。やっていけないのかー？）

……早速悩みを抱えていた。

逃走9：Aクラス（前書き）

ヴァン視点もうちつと増やすべきかなー？

逃走9：Aクラス

「ガラッ！」

さあ、ホームルームを始めるぞー。」

いつもと変わらないアーサーの姿。ベルは書いていた手を止めた。

「今日の時間割りは変更無しだ。それと、去年卒業したお前達の先輩のウィリアムつつー人が——こんな事言っても関係ないだろうが——王室付き魔法使いになったので一応報告。他には——」

よし、あいつはここのクラスじゃない。

安心したようにまた手を動かすベル。

後ろではシュメールのガツカリしたような溜め息が聞こえる。

「最後に一つ！」

お前達の新しい仲間だ！」

え、嘘。

「先生ー！まさか

転入生スカー！？」

クラスの元気のいい男子が尋ねた。

「ピンポン！その通り！」

途端にざわめくAクラス。口々に「男？女？」などとはしゃいでいた。

アーサーは少し困った顔をする。

「では、あー…

…呼びに行くわ。」

そう言い残すとアーサーは教室を出て行った。何か問題でもあったのだろうか。

後ろから小突かれた。

「何よ。」

「ヴァンジルドさんこのクラスになったんですね！私嬉しいですよ！」

シュメールは喜々とした表情でベルとは正反対だ。

「あいつじゃないかも知れないじゃない。」

何となくそう言ってやりたくなった。

「ま、すぐに分かりますわよ。」

そう言うと、シュメールは扉を見つめる。

次の瞬間扉が開いて、アーサーが大股に入って来た。続いて顔を出したのは――。

「キャアアア――！！！！！！！！！！」

やっぱり『あいつ』だった。

――回想終了――

ベキッ！

ベルが使っていたシャーペンの芯が音を立てて折れた。

皆馬鹿ばっか！

ちらりと窓際が一番前の席を盗み見ると女子が群がってその中心部にいる人物が見えない。

今はホームルームと一時間目の間の休み時間だ。ホームルームが終わったと同時に女子は――ベルを除く――ヴァンの周りに駆け寄り質問を浴びせている訳である。

「趣味は何？」

「目の色は元々なの？」

「好きなタイプは？」

「彼女はいるの？」

ベルはキヤーキヤー盛り上がる女の子達を内心馬鹿にしながら作業を進めた。

「ベルはあそこに行かないんだ？」

右隣りを見るとフィリップがニコニコしてベルを見ている。

「行かないわ。

興味ないもの。」

「本当？良かった！」

「……どうして？」

ベルがヴァンの所に行こうが行くまいがフィリップには関係のない事なのに。

フィリップは顔を少し赤くして慌てたように手を振った。

「た、大した意味はないんだ。」

「ふーん。」

カリカリカリ。

フィリップは再び口を開いた。

「あのさ、今度遊びに行かない？ショッピングでも何でもいいから

さ。」

「何で？」

ベルはとことん鈍かった。

「あーえっと、ほら！僕達クラスではよく話すけど学校以外では会った事ないじゃない？

だから会ってみたくなって。」

手を止めてうーん、と考え込むように頬杖をつくベル。

男の子と二人きりか…どうしようかな。

「返事は後でいいよ！次は実戦訓練の移動教室だしさ！」

ベルが返事に困っているとフィリップはそう言ってクラスの男の子友達のもとへ駆け寄って行った。

次から次へとされる質問。正直飽き飽きだった。

「俺移動したいんだけどー。」

ヴァンが席を立つと周りの女子達は今頃気付いたように「そうだった！移動教室！」と叫んで散り散りになった。

「ハァー。」

疲れた。

「お疲れだったね。」

「訓練場まで一緒に行く?」

顔を上げるとそこには、さらさらな黒い髪に黒目の150センチ位のちっちゃい男の子と、短く切った茶色の髪に鋭い目付きをした180センチ位の背の高い男子二人が立っていた。

「サンキュー。」

で、誰だお前ら?」

ちっちゃい方がその質問にクスリと笑う。

「僕はケルン」ピン。同じクラスに従姉妹がいるよ。よろしくね。」

「ピン、か…それってシュメイルの事か?」

ケルンは笑顔で頷いた。

「そうだよ。」

シュメイルから君の事は聞いてたよ。彼女、べた褒めだったなあ。」

「そうなのか?」

（俺何か褒められる事したっけ?

…関係ないけど、後ろのデカイヤツは無口キャラか?さっきからちっこいのしか喋ってねーな。）

そんなことを考えていると、ヴァン曰く『後ろのデカイヤツ』が口

を開いた。

「はっじめましてー！ー！俺の名はジャックリー＝レイスル！よろしくなあつ！？」

「…違ったみたいだなー。」

「え！？」

どうゆうことー！？

気になる木になるー！ー！」

ジャックリーはウザキヤラだった。

「じゃ、木になつとけ。さ、行こうかケルン。」

「うんっ！」

「おーい！ちよつと待ってー！？」

歩き出したヴァンとケルンに慌てて付いて行くジャックリー。後に裏で『美形問題児三兄弟』という何とも微妙な名前が付けられるのはもつと後の話である。

逃走10：いきなりの訪問者（前書き）

今回長いよー

逃走10：いきなりの訪問者

黒い雲が空を覆い、地上を人間界では見掛けることの出来ない不思議な動物たちが駆け回っている――ここは魔界。

「ヴァンはどこに行ったんだ！」

現淫魔王であるドレイン「ガレガン」クリファストは約一週間前に突然行方を眩ました息子の安否を気にしていた。

ヴァンと同じ銀色の髪に血のように紅い目。普通にしていれば美形なのだろうが、今や心配そうに歪められているせいで非常に勿体ない事になってしまっている。

それにしても王座にドツカリ座ったままで、心配だ心配だと喚いてもヴァンは出てこない事には気付いているのだろうか。

全て行動あるのみ、である。

「あのお、ドレイン王様。オレが探しに行って参りましょうか？」

王の間に8本ある黒い立派な柱の影からパタパタと飛んで来たのは、体長15センチ程のガーゴイル。

「何！？

ガーグが行ってくれるのか？」

ドレインの目に光が灯る。ドレインが本気を出せばあっという間に

見つける事は可能なはずなのだが。

……怠け癖というのは怖いものである。

「はい、任せて下さい。オレはヴァンの友達ですからあいつがどこに行くかなんて分かりますよ、多分。」

多分か。

ドレインは王座からずっこけそうになったがギリギリで踏み止どまった。

「よし、ではガーグにヴァンの事は任せた。

ヴァンとの結婚を雷凧姫も待ち遠しいと言っていたから早く見つかるといいんだがな。」

「そうですね。

じゃ、行ってきます。」

ガーグは頷くと空中でクルリと一回転して消える。

「しっかり連れ戻してくれよ、ガーグ。雷凧姫は何かと……怖いからな……。」

溜め息混じりに呟いたその言葉は広い王の間に広がり、溶けてなくなつた。

キンコーンカーンコーン。

「授業終了っだー!!!」

終わりの号令もまだ済んで無いというのに、伸びをしながら叫ぶデカイヤツ一名。

「ジャック、叫ぶと曰直さんに迷惑だよ。下手したらジャックの声と号令がかぶっちゃうかもしれないでしょ。」

曰直に迷惑と言いつつも自分が一番迷惑そうな顔をしているケルン。

一番前に座っているヴァンはと言うと、机に伏せて爆睡中である。

三人はたまたま席が近い。ヴァンが一番前の窓際で、ケルンがその右隣り。ジャックリーがヴァンの後ろといった座席だった。

「ヴァン！起きてよ！」

「うー…今何時間目だ？」

「もう今日の授業は終わったよ！」

この学校に来て今日が初めてなんだから、今日ぐらいは先生たちに好印象を与えとけば良かったのに…。」

ヴァンは眠そうに目を擦り、欠伸をする。

「最初の印象が良くても結局は後の印象の方が記憶に残るんだぜー

？」

ケルンはその言葉を渋々認めた。

「そうかも知れないけど……。」

「あの……！」

「んー？」

「え？」

ヴァンが目だけ、ケルンが体ごと声のした方へ向けると、小さい小動物のような女の子がウルウルした目でこちらを見つめている。

何なんだ？

「号令……出来ないの喋らないでください……。」

日直だった。

「ケールン！！」

人の事いえねーじゃん！」

フヒヒ……と笑うジャックリーだったが、ケルンの一睨みで黙り込んだ。

「それでは……起立。気をつけ。礼。」

三人が何も言わなくなった事で女の子は安心しきった面持ちで号令をかけ、今度こそ本日の授業は終了した。

皆が帰り支度をする中、ヴァンは机に肘を突き日直の女の子を目で追っていた。

「あの子可愛いなー。」

それにジャックリーが商売人のような調子で返す。

「お目が高いな！あの子学園で二位の可愛さなんだぜ！？」

ケルンは驚いた。

「何でそんなこと分かるの？」

「ふっふーん！俺の勘だ！」

勘かよ。

ヴァンは浅く息を漏らす。

まあいいや、じゃあ…。

「あの娘が二位なら一位は誰なんだ？」

「同じくAクラスのベル＝ヨークだ！」

即答するジャックリーをヴァンはただ呆れて見ていた。

「何だよっ！」

疑ってんのか！？ケルン、言ってやれ！」

「ハア、一位かどうかは分からないけどベル」ヨークは確かに男子に人気あるよ。」

「へえー…あいつが、ねえ…。」

ヴァンが教室の後ろに目をやると、ベルは丁度鞆を持って席を立つ所だった。隣にはシユメールがいる。これから二人で寮へ帰る所なのだろう。

そう言えばベルとあれから話してないな。

と、漠然と思った。

ケンカと言うのか分からないが、テスト後にシユメール宅でベルが切れた。ベルとはそれっきりである。

ヴァンがベルを見ていると、ベルが男子生徒に呼び止められた。

……楽しそうだな。

何がそんなに楽しいのか。ベルはヴァンの前で見せたことのない笑顔で笑っていた。

「ヴァン？どうしたの？ぼーっとして。」

「あ、ああ。何でもねーよっ。」

「……ならいいけど。」

悩みがあつたら僕達が相談乗るからね？」

そんなに真剣な顔をしてたのか。

「ハッ！」

悩みなんかねーよっ！」

べっと舌を出して見せる。

「だろうなッ！」

今日一日見てて思ったけどヴァンに悩みがあるなんて気持ち悪い！
！」

「…さて、帰るか、ケルン。」

「そうだね。」

「ちょっと待つてゝっ！！！？？謝るから！！！」

今日似たようなやり取りを既にしたような気がするがきつと気のせいだな。

寮は校舎からそんなに離れてない学園の敷地内にあつた。純洋風な建物で、白を基調とした学園と同じデザインである。つまり豪華。建物の壁に所々蔦が這っているのもデザインなのだろうか。

「ここだよヴァン。」

寮の一階のロビーに来た所でケルンが立ち止まり指差す。そこには

10人は余裕で座れるであろう、真っ白な長いソファがあった。

「これが何なんだ？」

そう言いながらも待てよ、とソファを凝視する。

このソファから魔力の波動を感じる。絶対何かある。

「腕に付けてるでしょ？生徒証と寮の鍵になるヤツ。それがこのソファに座る事で反応して自動的に自分の部屋のソファへ飛ばしてくれるんだ。

友達の部屋に行きたい時はその人の名前を心の中で言えばいいよ。どうなるかは自分で確かめてみて。」

ヴァンが返事をしようと口を開いたがジャックリーのデカイ声で邪魔をされた。

「ヴァン！！

俺を見とけよ？

こーやって……」

パッ

ジャックリーが消えた。

「なるほどなー。そこで次の瞬間自室のソファって事か。」

ヴァンはふむ、と考え込む。

「で、行きたい部屋がある時は相手の名前を心の中で言う、と。」

「…何をする気なの？」

心配そうに尋ねるケルンにヴァンはにっこりと返した。

「なーんにも！」

サンキューなケルン！

また明日会おうぜー？」

パッ

そうしてロビーにはケルンのみが残された。

「ちえっ何だよ、他人の部屋の場合はドアの前なのかー。」

ヴァンが辿り着いたのは自室……ではなくて、ベルの部屋の前だった。

通路にズラリとドアが並んでいる上に、部屋番号もぐちゃぐちゃなのであのソファーがないと確実に分らなくなるだろう。

ロビーのソファーはベルの部屋のソファーには飛ばさなかった。それは危ない連中が多い中、魔法管理会社がつた安全対策だった。

ヴァンはチャイムを押す。

ピンポン。

『はい。』

ガチャリと扉が開き、ベルが顔を出したがヴァンの顔を見るや「げっ」という顔になった。

「オッス！とりあえず、入れてくれ。」

にこやかに挨拶するヴァンにうさん臭そうな目で対抗するベルだったが、渋々扉を大きく開いてヴァンを招き入れた。

ボタン。

「何の用よ？」

見捨てて逃げた事謝りにでも来た訳？」

やはり開口一番に文句だ。

「んー、今日一日話してないなと思ってな。」

やはりベルの部屋はベルの部屋だった。寮の部屋の方にも、ベルの家のタンスの上にいた怪しげな人形が置いてある。そこを除けば可愛らしい部屋なのだが。

「何だ、そんな用事？」

この後フィリップが遊びに来るから早めに帰ってよね。」

そんな用事？まあ、確かにそうだけど。

ヴァンは軽く落ち込んだ。

それより、

「フィリップって誰だ？」

その方が気になった。特に意味はない。好奇心だ。

「あんたには関係ないでしょ！友達よ、友達！」

ほらほら帰った帰った！

蠅を追い払うように手を動かすベルの背後に黒いちいさなガーゴイルがいた。

「あ…ベル…！」

「？」

何よ！？」

「スウー…」

息を大きく吸い込んでいるこのガーゴイルには見覚えがあった。

これは——こいつは——ガーゴイルのガーグだ——！

「ガーグ——！止めろっ——！こいつは獲物じゃ……」

ブオッ！

「きゃあああ——？」

ベルにピンクの気体が襲いかかる。

「あー… やっちまったか…。」

あちゃー、と頭に手をやるヴァンにガーグと呼ばれたガーゴイルはパタパタと嬉しそうに近付いた。

「よっ！ヴァン久しぶり！朝から探し回ったんだぜえ！？」

「久しぶりー。つか、お前はなんて事をっ！」

そう言っ指差したその先には、ガーグのピンクの気体が直撃したベルが力無く床に倒れていた。

「ハア、ハア、あんた… ガーゴイル… あたしに何したの…？」

ベルの表情はどことなく色っぽい。

「へへ！強力な媚薬を吹き掛けてやった！いまからお前はヴァンの遊び相手に…。」

「するかーっ！ー！」

ゴイン！とヴァンが強烈な拳骨を食らわした。

「いてーっ！？」

何なんだよいきなりー！魔界にいた頃はこうやって毎日のように女の子を相手にしてたじゃん！」

ガーグはブクーと膨らむタンコブを短い手で擦っている。

「この女を襲ったりしたら噛み付かれるから襲わねーの！」

ヴァンの本音突撃である。

「えー！ヴァンにそんなことする女いたんだ…」

「……………」

「……………」

ガークとヴァンは本人の前で本音トークをしていたことに今更気付
き、ソロソロとベルを見た。

「あ…んっ、熱い…」

え、エロい。

二人の心配を余所に、一人悶えるベルは果てしなくエロかった。

ヴァンはジャックリーが学年一と言ったのをある意味納得する。

「熱い……………脱がせてヴァン……………」

今のベルは制服の白いブレザーは寮に帰った時既に脱いでおり、ブラウスとスカートのみ。それを脱いでしまっただけでは教育上良くない。
良くないのだが、ここに子供などいない。

「ハア、ヴァン…早くう、熱いの……………」

「ほら、ヴァン。

あんな事言ってるぞ。

今なら噛み付く事もねーんじゃないの？」

「……。」

「手を出さないなんていつものお前らしくないぜ？

…まさか、この女に惚れちゃったのか！？」

その言葉の何がおかしかったのか、急に大笑いするヴァン。

「クククク…アーツハツハツハ！」

んな訳ねーだろ！

…やってやるよベル。

お前のお望み通りの事をな！」

心臓の音がやけに大きく聞こえる。こんなものいつぶりなのか分からない。

ヴァンは深く息を吸い込むとブラウスのボタンを一つ外してみた。プチ、という小さい音がしてベルの白い肌が少しだけ露わになる。

「んう……」

ベルがみじろぎをした。ヴァンの肩がビクッと跳ね上がる。

「……ヴァン、お前ドーターのヤツみたいになってるぞ。」

「……るっせえ。」

もう一つ開けようと手を伸ばす――が。

ピンポン！

「ヒイ！」

……何だ、訪問者か。脅かすなよな――。」

ガーグの目線が痛い。ヴァンはゴホン、と大袈裟に咳払いするとゆっくり立ち上がった。

「えっ！？続けないのか！？」

「訪問者が先だ。」

恐らくベルが言っていたフィリップとかいうヤツだろう。

ヴァンは推測した。

玄関のドアに近付き、全開する。

「……………」

互いに無言だった。

そこにいたのは放課後の教室でベルに話しかけていた男子生徒。ヴァンがベルの部屋から出て来た事で「なんで!？」という顔をしている。

「ふーん、お前がフィリップか…。」

失礼な位ジロジロ見るヴァン。フィリップは数秒口をパクパクさせた後、ようやく言葉を発した。

「っ転入生のクリファスト!なんでここに居るんだよ?ベルは?ベルはどうしたんだ!？」

フィリップはヴァンを押し退けて無理矢理部屋の奥に入っていく。

気分はお姫様を助ける王子様気取りか。くだらねー。

ヴァンが呆れていると、暫くして部屋の奥の居間から歓喜にも近い絶叫が聞こえた。

「ななななんだこの破廉恥な格好は!?
クリファスト!お前がやったのか!？」

「破廉恥か?普通に倒れてるの間違いじゃねーの……………」

そう言いながら居間に戻ったヴァンは啞然とした。

今さっきまで着込んでいたハズのブラウスとスカート、おまけにブラジャーとパンツが床に脱ぎ散らかされており、ベルが床に素っ裸で仰向けに倒れていたのだ。

ベルの大きめの二つの膨らみが、彼女の些細な動きに反応してプニプニと形を変える様子は男二人を暫く沈黙させた。

「ハア、ハア…嫌…やめて…」

ベルの顔が苦痛に歪む。

ハッと我に返ったヴァンは本能的に悟った。

これは…ベルが自分で脱いだんじゃない！

バキイ！

「ど、どうして殴るんだ…！？」

「フィリップ……」

…殺すぞ？

「ガーグ、紫やってくれ。」

「りょーかい！」

ヴァンが手で合図すると、ガーグが躍り出て口から紫色の煙をフィリップにぶち当てた。

「くうつ…!？」

「この紫煙は今見た記憶を消し、一か月間という少しの間だけだがお前をくらいいいキャラに変える。」

ハッハッハア! ざまあみる馬鹿野郎!

ヴァンはがっくりと気絶したフィリップを御丁寧に魔法で寮の外に送った。

「なあ、聞いていいか？」

裸のベルを出来るだけ直視する事を避け、自分の着ていた上着をかけるヴァンにガーグは尋ねる。

「どーぞ。」

「オレも紫煙出しといてナンだけどさ、何であいつをあんな目に遭わしたんだ？」

「ベルを自分で脱がしといて俺のせいにしたじゃねーか。」

ヴァンは腕を組んだ。

許さないというポーズだろうか？

「えっ! ベルが自分で脱いだんじゃねえのか!？」

「え、だってあの時ベルが『嫌: やめて』って言ったしー。」

丁度その時ベルがもじもじと動いた。目は閉じている。眠っている

のだろうか。

「嫌…やめて…」

「ほら、こんな感じで！フィリップが脱がしたから嫌がってたんだよ。」

今は眠っちまってるけど、きっとフィリップに脱がされた夢見て寝言でも…」

自慢げに言うヴァンだったが、ベルの寝言はまだ終わりではなかった。

「嫌…やめて…自分で脱いだのはいいけど皆で見るのはやめて…」

あれ？

「ヴァン？」

ベルは自分で脱いだって言うてるけど。」

「そんなハズは…」

…逃げるぞ。」

裸で床に放置され、次の日ようやく目覚めたベルが風邪を引いてしまったことは言うまでもない…。

逃走11：尋問（前書き）

次の日の話。

逃走11：尋問

剣が激しくぶつかり合う甲高い音が訓練場に響く。

「ハッハア！」

遅いぜジャックリー！」

「クソーっ！」

まだまだあー！」

ジャックリーが大振りに剣を振り下ろすが、あっさりヴァンに止められる。

「反撃するぜえ！？」

力まかせにジャックリーの剣を薙払うと、足にグツと力を込め一瞬でジャックリーの背後に移動した。

「どこ行つたヴァン！？」

どうやら人間には見えない素早さだったらしい。

「戦場だったら終わりだな。」

ヴァンは背後から剣を首に突き付けた。

「ピピーツ！試合終了！クリファストの勝利！」

戦闘術担当のアーサーが勝敗を言い渡すと、

「キヤア〜!」

どこからともなく黄色い悲鳴が聞こえる。

もう皆さんお解りだろうが、今は戦闘術の授業である。

戦うペアはアーサーの気分で決まる。ヴァンはやる気が見えない為、ジャックリーは大声ではしゃいでいた為それぞれ選ばれたのだが、始まって数十秒で決着がついてしまった。

「はあー、次のペアはどうすっかな。」

こんなに早く戦闘が終わるなどアーサーの予定には無かった。アーサーは新たなペアを決める為に生徒を見渡していたが、そこでイイ事を思い付く。

(ピコーン! 同じレベルの女子同士試合をさせれば決着つきにくいじゃん?)

そうなのだ。女子の試合は相手に攻撃する事を遠慮する場面が度々ある。理由は様々だが、一番の要因は友達を傷つける事の出来ない優しい心だろう。それに加え、同じレベルと来れば最強の時間潰し間違いはない。

「それじゃ、次のペアは……アンジェラⅡダイヤモンドとシュメールⅡピン!」

シュメールとアンジェラはお互い歩み寄り、握手を交わす。これはこの魔術学園の戦闘前の伝統のようなものだ。

ヴァン達三人組は訓練場に植えてあるケヤキの木陰でぼーっとその様子を見ていたが、ヴァンがあることに気付いた。

「あのアンジェラってこの前の日直やってた可愛い子！」

結構な声の大きさだったせいか、その声はアンジェラとシュメイル達の所まで届いてしまったらしい。

アンジェラは顔を赤らめて恥ずかしそうに俯き、シュメイルは頬を膨らました。

「ヴァン、皆の聞こえる所でそんな発言は控えた方がいいよ。」

ケルンが困ったように忠告する。

「女子同士雰囲気悪くなるでしょ。」

ヴァンはへっと笑うといつの間にか始まった二人の戦闘を眺めた。

シュメイルは弓矢を魔力で形成し、アンジェラは扇子を形成している。

扇子か、楽しみだな。

色んな意味で。

これは集中して見ないと。

「そーいや、ヴァン！

お前ブレザーは！？」

せっかくが集中して見ようとしているのに、とジャックリーを睨むヴァン。だが、

「それは僕も気になってたんだ。何で上はワイシャツだけなの？」

と、ケルンまで便乗して質問してきたので、答えざるを得なくなっていました。

「うーん、暑いから？」

ベルが裸だったので上着を掛けてやったから、とは言えない。ヴァンは適当にはぐらかすことにした。

「暑い、ねえ……」

ケルンの言葉と同時にサアツと冷たい風が吹き抜ける。

言ってしまった後で、少し無理矢理な言い訳だったなと後悔した。

その時だった。

爆風が吹き荒れ、

男子生徒の興奮した叫びが訓練場を満たす。

ヴァン達は何事かと戦闘に目を移し、その光景を目にしたケルンがすぐさま叫んだ。

シユメールが暴風にすっかり包まれ、苦しそうに目をギュツと閉じている。男子が騒いでいるのは彼女のスカートがはためき、レースのついた黒いパンツが丸見えになってしまっているからだろう。

従兄弟としては面白くないのか、ケルンは騒いでいる男子生徒を睨んだ。

一方、アンジェラは冷静にその様子を灰色の目に映していた。おっとりした小動物のようなイメージとはまた違った一面。

ヴァンはアンジェラを次のターゲットにするか、と本気で考えた。

「あの子を狙うのか？」

耳元で何者かが囁く。

「！？」

ガーグ！皆に説明すんのめんどいから来るなって言っただろー？」

ケルンは男子生徒達へ、ジャックリーはシュメールのパンツへと意識を取られている事を確認する。

今なら行ける！

ガーグを手に握り締め、ヴァンはコソッと訓練場を抜け出しトイレへ向かった。

何故トイレか？

昔から秘密事〓トイレの個室じゃん？

「ゴホッ、ゴホッ。」

遅刻しちゃった…

一時間目の戦闘術始まっちゃってるわよね…。」

白いマスクを付け、手に男子用のブレザーを持ったベルは訓練場への道を急いでいた。

遅刻した理由は、昨日床に裸で寝てしまい風邪を引いた為。

嫌だわ、死にたい！

ベルは思う。

媚薬のせいとは言え、ベルはヴァンやフィリップの前で裸を見せてしまったのだ。暫くは立ち直れそうもない。

「それにしても妙よね…」

ベルは首を傾げた。それは昨日のヴァンの行動。あまりの体の熱さに、ヴァンに「脱がせて」と頼んでしまった時の事だ。

あの時のヴァンは、全然淫魔らしくない。淫魔に加えあのルックスならば、女の体なんか慣れているハズだ。実際本人から一度だけ女絡みの武勇伝(?)を聞かせて貰ったことがあるのだが、それはそれは凄まじい肌色物語だったのを覚えている。

そんなヤツがどうして、あたしなんかを脱がす事が出来なかったのかしら？

あいつは寝ている女がいれば襲うようなヤツだと思っていたのに、あたしが裸で寝ていても襲ってないし逆にブレザーを掛けるなんてマネをしてくるなんて…。

本当に『らしくない』。

あたしが床に放置されたのも、あいつがあたしの裸の体に触れられなかったから？

ベルはブンブンと頭を振った。

意味が分からない。

そんなハズはない。

「あーもう！

調子狂うわねっ！」

ベルはいつの間にか見えてきた訓練場のゲートに向かって小石を蹴った。

小石は高く飛び上がって……。

「あだっ！」

タイミングよくゲートから出て来た男子生徒にぶつかった。

「ごめんなさい！」

慌てて駆け寄るベルに、痛みで頭を押さえ俯く銀髪の生徒。

「あの…大丈夫？

ごめんね？」

フツと男子生徒が顔を上げ、ベルと目線が絡み合う。

今更だが、相手はヴァンだった。ベルの顔を見て、少し顔が赤くなつたように見えなくもないが気のせいかもしれない。

無意識にベルの体温が少し上昇する。

「ベル…」

「ヴァン…」

名前を呼び合い見つめ合う姿は恋人同士のようなようだ。もっとも、本人達にそれを言えば確実に怒鳴られること請け合いだが。

数秒そうした後、ヴァンはいきなりハツとした表情になり、どこかへ駆けて行く。

「な、何やってたんだろあたし…。」

心臓が騒がしい。

それを昨日裸を見られたせいだ、と自分に言い聞かせながらベルは訓練場に通じるゲートへ入って行った。

「言え！」

ガーグ、お前は俺を魔界に連れ戻しに来たのか？それともただ遊びに来ただけなのかーっ！？」

と、少し凄んでみるヴァンに。

「どっちもさ。」

淫魔王様からは早く連れ戻せって言われてる。」

涼しい顔で答えるガーグ。

名付けて、『ヴァンジルド・ドレイン・クリファストの尋問〜トイレ編〜』の始まりである。

「で？お前はどうしたいんだ？」

「オレはヴァンの気持ちを優先……って言いたいけど命令ダカラな。それに俺も雷凧姫が怖いし。」

ガーグは雷凧を思い出したのか、ブルッと震えた。

「雷凧か…確かにアイツは怖い……けどな！！勝手にそいつの許婚にされた俺はどーなるんだっ！」

ヴァンはウルッと涙目になる。女子が見れば発狂しそうな光景である。

「どうなるんだろな？」

「ごめん分からね。」

ガーグは薄情なガーゴイルだった。

「……。」

ヴァンは個室のドアを黙って見つめていたが、ポツリと尋ねる。

「…どうやって俺を見つけたんだ？」

「簡単さ！

ヴァンの魔力を追ってみただけ！淫魔は魔力の質がちょっと違うからな。」

ああ、その手があったか。だったら学園は隠れ蓑にならねえじゃん。
ヴァンはうなだれた。

これでは連れ戻されるのも時間の問題だ。あの分からず屋の父親に
許婚をやめさせるよう説得するしか道は無いらしい。

「苦勞が絶えないな。ヴァンジルド王子？
諦めて雷凜姫と結婚したらどうだ？」

ブチ。

ガーグの憎たらしい程気楽な一言はヴァンの怒りの導火線に火をつけた。

逃走12：決着（前書き）

後半グダった

最悪（´|`、、）

そしてこの話を

もう一つの物語の方に

投稿しちゃて焦った

最悪（´|`、、）

逃走12：決着

風がビュビュウ吹き荒れる。シユメールはスカートが捲れ上がり、その中身をクラス男子が涎を垂らす勢いで見ているのを知らなかつた。そんな余裕が無いくらい追い詰められていたのである。

苦しい…！何とかしなければいけませんわ…！

風で息が出来ない中、途切れ途切れに詠唱の言葉を紡ぐ。

「水…よ、…我に向かう…障害を流し、消し去れ…『FLOOD』
…！」

ゴウッ…！

シユメールの両手から発生した大量の水はアンジェラの風を飲み込んで津波のようにアンジェラへと向かう。

「……………っ…！」

扇子で風を起こしてシユメールの魔法を薙払おうと試みるアンジェラだったが、風は水を僅かに飛び散らせるだけで効果を成さなかった。

ザアアアア…！

とうとうアンジェラにシユメールの魔法が直撃する。やり過ぎな位の水の嵐はシユメールがもう十分だと判断するまで続いた。

「もういいですわね。」

そう言つて魔法を止める。水が襲いかかっていた場所にはグツシリ濡れて気絶しているアンジェラが倒れていた。

「ピーッ！勝者、シュメール！ピン！」

アーサーの判定が入る。

ワアッと盛り上がる男子生徒。彼らの気持ちとしては、「いいもの（パンツ）を見せてくれてありがとう」という所だろう。

戦闘終了後、シュメールは生徒の中にベルの姿を認めた。彼女はマスクを付け、手に黒い男子用ブレザーを持っている。

「ベル！」

遅刻した原因は風邪ですの？」

それにベルは困ったように笑い、

「ええ、昨日体冷やしちゃって。」

と答えた。

「そのブレザー……。」

シュメールがまじまじとベルが手に持っているブレザーを見ると、ベルは少し顔を赤らめた…… ように見える。

シュメールにはこのブレザーが誰の物かすぐにピンと来た。

——今日ブレザーではなく、ワイシャツだった男子生徒は一人しかいませんわ…。

シユメールがベルに昨日ヴァンと何があったのか問い詰めようと口を開いたその時！

ドオオオオオン！！！！

訓練場からそう離れていない所から爆発音が聞こえてきた。続いて、ブシュー！！という水の音。

「な、何事ですか？」

訓練場にいる他の生徒達はパニックに陥っていた。いきなりの爆音に驚いて悲鳴を上げる者、「悪の組織が学園を乗っ取る為に攻めて来たんだ！」と脈絡もない事を叫ぶ者、反応はそれぞれである。

「ピピピ！！」

皆落ちて着けー！

俺が見に行くから皆はここに……おいちよつと！」

アーサーの話もろくに聞かずにアーサーの前を走って通り過ぎる男子生徒二人。一人はシユメールの従兄弟であるケルンと、うるさい事で有名なジャックリーだった。

「お前たち！戻るんだ！」

アーサーの必死の呼び掛けにケルンは走りながら答える。

「ヴァンがいないんです！」

まだ近くにいたのだろうかここに呼び戻さないと！」

「あなた達が行くならあたしも行くわ！」

ベルも便乗して走り出す。

「あたし、ヴァンが向かった方向なら分かるから！」

「待ちなさいベル！」

私も行きますわ！」

ベルには負けてられない。それはお嬢様としてのプライドでもあった。

「こら！ピン、ヨークー！」

アーサーは引き止めようと手を伸ばすが、その目の前をAクラスの生徒達が一斉に通り過ぎて行く。

「せんせー、ごめんなさい。」

「何か楽しそうだから行くねー？」

「先生も来なよー！」

生徒達は口々に声をかけていく。しまいには皆訓練場のゲートを出て行ってしまった。

水道管は破裂して辺りに水を振りまき、トイレだった空間はすっかり破壊され瓦礫がゴロゴロ転がっている。

そんな中にベル達Aクラスは茫然して立っていた。

「ガーグ！」

お前が許婚になってみろーっ!!」

「やだねっ！」

あんな怖い許婚いらねえもん！」

この破壊された後と今の彼らの姿を見れば当たり前だろう。

「ガーグって確かあのちっちゃいガーゴイルだったわよね…。」

ベルがぼそりと呟く。

そうなのだ。ベル達の目の前にいる二人は、ヴァンにはワイシャツを突き破って翼が生え、ガーグと思われるガーゴイルは今や170センチぐらいに巨大化していた。

「ヴァンジルド君に翼が…」

「アレってガーゴイルって言うんだよね？」

「ここって確かトイレがあった？」

ザワザワザワ。

「なあ、ヴァン？
騒がしくないか？」

「お前には周りを気にする余裕なんてねえ、よっ！」

ヴァンはワイシャツの袖からナイフを何本か取り出し、ガーグに向かって投げる。

カカカカッ！

ナイフをガーグが飛んで避けた為、それらはトイレのドアだった白い木片に刺さった。

「やったな！？」

プクツとガーグの頬が膨らみ、黒い煙を吹き出す。

「くっ！」

口を腕で覆いつつ、バサリと煙を翼で払うヴァンだが、追い払った煙の先にケルン達がいる事に気付いた。

「なっ！？」

ケルン、ジャックリー！？その煙を吸い込まずに魔法で追っ払え！」

「魔法で？」

「分かった！」

ケルンが素早く反応して詠唱を始める。

「風よ、すべての物を吹き飛ばし我を助け賜え…【BLAST】」

「そ、その詠唱って……」

ゴオオツ！！

ヴァンが焦って声をかけるが時既に遅し。

風が爆発した。——その場にいた全員が思った。

「お前使う魔法をかんがえろおおおお！！」

風に逆らうように飛びながらヴァンが叫ぶ。

「キャアツ！？」

次々と風にさらわれてどこかへ飛んで行くクラスメイトの中にベルもいた。

「！

ベル！！」

「油断しちゃだめだぜ！？」

風を背にバザバサ近寄るガーゴイルの気配を感じて振り向くと、ニヤリと不敵に笑うガーグが。

「そっちは風下だヴァンジルド王子様っ！！」

「しまった…！」

ケルンの風の魔法でスピードが上がったガーグの黒い吐息は容赦なくヴァンに襲いかかった。

「どうだあ!？」

オレの勝ちだつ!!

黒煙で気絶しなっ!」

ガーグが勝ち誇ったように叫ぶ。どうやら黒い煙は相手を気絶させる効果だったようだ。

その時。

突然風が止んだ。

風に飛ばされていた生徒達が地面にボトボトと落ちていく。それは翼はあるが、気絶してしまったヴァンも同じ事だった。

地面に横たわっているヴァンのもとへバサリと着地するガーグ。

「お前には可哀想だが魔界に連れ帰らせて貰おうかな。」

そう言つてヴァンを持ち上げようと手を伸ばしたが、

「馬鹿め。」

ガーグの左頭部に鋭い蹴りが入り、ズザァ!と飛ばされるガーグ。ヴァンは気絶などしていなかった。

「風のおかげで、息止めとけば一瞬で通り過ぎる煙を吸うヤツはいねーよっ!」

俺の見事な演技の前に平伏しな！」

ガーグは横たえたまま、ツカツカと歩み寄るヴァンを見てフツと息を漏らす。

「見事…な蹴り…だった…ぜ…。」

「当たり前だアホッ！」

……ウツ！？」

ドサリと地面に倒れ込むヴァン。

「やっと…効いたか…。それ…は肌から…染み込む…んだ……………」
ガクツ。」

「畜生……新タイプ…考え出しやがったか……………ガクツ。」

——こうして傍迷惑な内輪揉めは終結を迎えた。

被害総額：三千万ゴールド（日本円にして三千万円）

被害者：ケルン（風を生み出した本人）とアンジェラ（訓練場で気絶中）を除くAクラスの生徒達

得た物：クラスの団結、傷だらけの笑顔

結論：お金で買えない価値がある（意味不明）

逃走13：償い（前書き）

眠いよ

逃走13：償い

「ん…」

パシャッパシャッ

何の音だ…？

まあいーや…ねみー。

ヴァンの意識は再び闇に吸い込ま…

「んッ！や…あぁっ！」

女の子の喘ぎ声にギシッギシッとベットの軋む音。

………！？

何なんだ？つか、ここどこだ！？

ヴァンはすっかり覚醒した。

薬品の匂い…そうか、俺は気絶して保健室…。

しかし、こんなところでやってんのか…やるねえ。

声は隣りのカーテンに囲まれたベットから聞こえるようだ。

ちなみに、ヴァンが寝ているベットにも一応カーテンは付いていて、やはりそれもカーテンで覆われている。

パシャッパシャッパシャッ

「その顔いいよ」

あ。また聞こえる。やってる時の女の子の写真でもとってんのか？
その顔いいよって…モロオッサンの声じゃねーか。

「や、やんツ！

……」

クチュクチュと卑猥な音。

あー、うざってーな？

「保健室のせんせーい！ここでやってる人達がいまーす！」

この部屋のどこかに居るだろう、保健室の先生へ何となく呼び掛け
てみた。

途端、隣のカーテンの中の空気が張り詰める。

そして、数分後バタバタという騒がしい足音がして何者かが去って
行った。

多分女の子だな。匂い的に………そういや、この匂いって…。

「目が覚めたんだね？
もう帰っていいよ。」

ヴァンの周りのカーテンがシャッと開けられると同時に、さっきの

オッサンの声がした。

ブヨブヨの脂肪を蓄え、眼鏡をかけたオタクみたいなオッサン。

——少なくともヴァンにはそう見えた。

保健室の先生…保健室でやってたのかよ…。

ヴァンが保健室を出るとばったりケルンとジャックリーに出会った。

「ヴァン！！目が覚めたんだなっ！？」

「僕ら今迎えに行こうとしてた所だよ。」

「おー、すまんすまん。」

「今何時間目だ？」

ヴァンが尋ねるとケルンは腕時計を見た。

「今は昼休みだよ。」

ヴァンは一時間目の終わりの方に気絶ちゃったから、大体3時間位気絶してたね。」

ケルンは続ける。

「あの後大変だったんだよ？トイレ全壊しちゃっし、怪我人多いし。それとね、ヴァンは目が覚め次第学園長室だっさ。多分昼ご飯抜きだね。ドンマイ。」

ジャックリーが「可哀想ー！」とクスクス笑った。

「学園長室か！！」

確実に説教だな！！

ヴァン頑張れよ？」

説教と聞きすっかり意気消沈して学園長室に行こうと歩き始めるヴァンだったが、気になった事があったのでクルツと振り向きケルン達を見た。

「俺の正体の事何も言わねーんだな？」

その問いに対してのケルン達の反応はヴァンにとって意外なものだった。

「ヴァンが悪魔族だったってこと？」

確かにびつくりしたけど、この学園じゃ珍しい事じゃないよ。天使族だって鬼族だって巨人族だっているんだ。色んな種族が皆平等に学べる、そこがこの学園なんだ。」

「俺はヴァンの耳が尖ってんのと目が紅いのを見て人間じゃないって何となく分かってたぜっ！？」

ああ、平等、そうなのか。——ヴァンは少しだけ安心した。悪魔と聞いて怯える人がいないかと少しだけ心配だったのだ。

「そうか…サンキューな！」

春の日差しが暖かい。翼が突き破ったせいで背中が破れたワイシャ

ツでも今はそう寒くは感じなかった。

「ここか、学園長室。」

ヴァンは金色のドアノブが美しいドアの前へ来ていた。

ここまで来るのにどれだけ苦労したことが。学校に入りたてのヴァンにとって、この広い学園で迷わずに目的地へ辿り着く事の方が奇跡だった。

迷って、すれ違う生徒に聞いて、また迷う。自分では方向音痴の自覚は無いのだが、その素質は備えているらしい。

コンコン。

「ヴァンジルド・ドレイン・クリファストだ。学園長に呼ばれて来たから入りまーす。」

そして相手の返事を待たずに入る。学園長室は事務用机、ソファ、テーブルしかない至ってシンプルな白い部屋だった。学園長が見当たらない代わりに、女の子がソファで眠っている。

近付いて見てみると、年齢は大体17、18歳だろうか。この学園の生徒かと思ったが、制服を着てない辺り、どうも違うらしい。すやすやと眠る彼女は、腰まで伸びたピンクの髪。白いワンピースを着ている。むにゃむにゃと口を動かす仕草は可愛いという言葉以外形容しがたい。

考えるより、体が動いた。——そんな感じだった。

眠る女の子の唇に自分のそれを付けてみる。

柔らかい。

今度は女の子の頭を包み込むように抱き寄せ、強く吸ってみた。精気を吸うつもりなどなく、ただのキスだ。

チュウウウウウ！

女の子の瞼がピクツと動き、パツチリと開いた。

「ヴァンジルド・ドレイン・クリファストと見られる男を確認。我は考える。この男は何をやっているのだろうか。唇と唇を合わせ合う、接吻——キスとも呼ばれるソレは通常相手に対する愛情表現として用いられる。そして我は結論を下す。ヴァンジルド・ドレイン・クリファストは我に愛情を持っているのではなからうか。いや、そうに違いない。」

このキャラなんてゆうキャラ？

「いや、ただ気まぐれで……」

「我は知っている。」

世の中に存在するというツンデレという素直になれない生物を。」

女の子はキラキラした目でヴァンの手を握った。

何か誤解されたいらしい。話を逸らさなければ、とヴァンは焦った。

「学園長に用事があつて来たんだけど、君一人なのかー？」

「若くして学園長のキャシー＝ロビンソンとは私の事である。そしてここにはヴァンジルド＝ドレイン＝クリファストと我しかない。」

「学園長!？」

「うそっそ絶対うそだーっ!」

キャシー学園長は首をちょこんと傾げる。

「我は分らない。この男の疑問が。」

だから置いておく。そして本題に入る事に決めた。」

彼女はスックと立ち上がり、ツカツカと機械的な動きで事務用机につくと組み合わせた手を机の上にドンと乗せてヴァンを見つめた。

金色の目がキラリと輝く。

「我は尋ねる。トイレの弁償をどうするつもりなのかを。」

やっぱりそう来るか。ヴァンはズッシリと胃が重くなるように感じた。

人間界の金なんて持ってない。弁償しようにも出来ない、というのが本音だった。だから。

「どうすりゃいいと思うー?」

逆に尋ねてみた。

キャシー学園長は微かに口元を吊り上げる。

「弁償のお金が無い場合、我の元で働いて貰おう。」

「他には。」

「無い。」

溜め息を必死に堪え、また尋ねた。

「その仕事の内容は何だ？」

「我に付き従う、奴隷として働いて貰うことである。」

「へえー、俺なんかを奴隷にしたらそのうち学園長を襲っちゃまうぞ？」

「それがヴァンジルド・ドレイン・クリファストの我に対する愛情表現ならば我は受けよう。」

脅しが効かない。だから学園長にまで登り詰めれたのか？

ヴァンは情けない気持ちになりながら思った。

「…分かった。」

学園の物を壊したのは俺だしな…。」

シユンとうなだれて見せるヴァンだが、内心は喜びもあった。

——学園長を襲っていいって本人の許可が出たし、楽しませて貰おうかな。

逃走14：マイケル（前書き）

お久しぶりです（*。ω。）そして明けましておめでとついでいま
ーす！

久々の更新です（^ω^）

実は今回2回書き直しました！

まだ大変でしたよ！だいぶ書いた後に書き直しますのでからね（、、）
ゲロー

逃走14：マイケル

「ふイー、つつかれたー！」

昼休みが終わる5分前に教室に戻って来たヴァンが派手な音を立てて椅子に座る。

その様子を離れて見ていたベルだったが、ヴァンが破れたワイシャツを着ているのを見て、ブレザーを返してない事を思い出した。

アイツに返さなきゃ。

目立たないように、慎重かつスムーズに！

ブレザーを握り締め、ブツブツ呟きながらヴァンの席に近付く様子は怪しいという以外言葉がない。

「早かったね。1、2時間くらい怒られると思ってたのに残念だなあ。」

「ちょっと待て。笑顔で言う事じゃねえぞ？」

「ふふ、そうかな？」

ヴァンとケルンの会話が聞こえる。

二人はベルに背を向けて座っているのでベルの接近にまだ気付かないようだ。

ベルは何故か少し早まった鼓動を沈めようと自分に言い聞かせた。

ただ『忘れ物よ』って突き返すだけ！ただ『忘れ物よ』って――

「アレ！？」

ベル「ヨークー！お、俺によよ用事かあアッ！？」

クラス一うるさい男、ジャックリーがベルの接近に気付いた。その大声にヴァンとケルンは何事かと振り向く。

「あんたになんか用はないわよ。用があるのは……」

「出たあーっ！出ましたツンデレ！

俺に対してツンツンですかあー！？！ということは俺の事……好・き？
カーッ！参っちゃうぜー！止めるよこんなところで愛の告白はあ
ーっ――！」

お前は馬鹿かと口を開こうとしたその時、ヴァンが面白そうな口調で言った言葉に邪魔された。

「へえー！ベルってジャックリーの事好きだったんだ。愛の告白なら俺たち邪魔だなー。他のところ行こうぜケルン？」

「は！？ちが……」

「そうだね。後五分くらいで授業始まっちゃうからジャックに告白するなら出来るだけ短めによろしくね。」

達者でな――！とヒラヒラ手を振りながら離れて行くヴァン達。

「ち、ちよっと――」

「さあ！…ドーンと愛をぶつけていいんだよ！？」

ジャックリーは両手を広げてベルを受け入れる体勢に入る。

「ばっかじゃないのっ！？待ちなさいヴァン！！」

キンコーンカーンコーン

「着席しろー！チャイムが鳴ったぞ！」

始業のチャイムと同時に召喚術の授業担当であるマイケルが入ってきた。

「あれ？あと五分かと思ってたんだけど……僕の時計遅れてたみたいだね。」

腕時計を見て着席しながらどうでも良さそうな口調で言うケルン。ヴァンはベルをちらりと見て、残念そうな顔をした。

「惜しかったなー？」

告白には時間が足りなかったみてえだ。」

「んなっ！？

だから違っつて…」

「おいその二人！
着席だ着席！」

「はいよっ。」

否定しようとした所、マイケル先生のお咎めが入った。

——これ以上先生の授業の邪魔をする訳にはいかないわ。

ベルはマイケルの堪忍袋が早くもはち切れそうなのを感じていた。何故かと言うと、マイケルのこめかみに立派な青筋が立っていたからだ。

仕方ない。次の授業の合間の休みに返そう。

何故かどつと疲れたベルは足早に自分の席についた。

それを確認したマイケルは満足げにフガフガと不思議な音を出す。説明していなかったが実はマイケル、相当の巨漢だ。

真冬が来てもそう寒さを感じなさそうな分厚い脂肪という防寒具。ポツと紅い頬は別に恋をしているのではない。

口調は偉そうだが、愛嬌のある容姿とミスマツチな為全然怖くない。

密かな人気キャラクターことマイケルはつぶらなキラキラした青い目でクラスを見回す。

クラス中が何か来る！と察した時、元々声が高かったので威厳を持たせる為かわざと低い声でマイケルは言った。

「今日は使い魔を召喚したいと思う！

召喚する呪文は教科書21ページを参考にしろ！さあ机を後ろに下げなさい！」

いきなりかよ！聞いてないわー！などの声が一斉にクラスから上がった。

そんな中、ヴァンは不思議そうな顔で生徒を見回している。

ベルはその様子に気付いていたが、その事をシュメールに言おうものなら、ベルがヴァンを注意して見ていたという点で変に勘繰られては困る。

グツと相談するのを堪え、黙って机を下げることにした。

ガタガタと全員の机が教室の後ろに寄せられる。

とうとう教室の前半分には大きな魔方陣が一つ書ける程の空間がポツカリと空いた。

「使い魔召喚用の魔方陣は間違えると危ない、うん、非常に危ないしたがって僕が特別に魔方陣は書くでしょう。まあ今回は僕も少しばかり手伝うが、いつも先生を当てにしてはダメだ。」

ここでマイケルは生徒を見回す。

「分かったか、返事は？」

クラスからは、はい、という気のない返事。

マイケルはそんな生徒達の反応には既に慣れたのか気にした様子も見せず、ウム、と低く頷くと白いチョークを右手に持ち大股に教室の空いた空間に歩み出た。

カッカッカツという無機質な音が教室に広がる。

今から『使い魔召喚』というものがあるらしい。俺にはよく分かんねーけど。

ヴァンは無表情で、頬を紅潮させた豚肉が必死に魔方阵を書いているのを見ていた。

「ね、ヴァン。君の魔界では使い魔とかはいたの？」

ケルンは興味津々だ。

「使い魔かー。使い魔を使用する悪魔なんて聞いた事ねーよ、必要ねーもん。それに同じ魔界に住む仲間をこき使う事は好まねーんだよ。」

ヴァンはそこまで言って軽く目を閉じた。

「そっか…ごめんねヴァン。僕ら人間が使い魔と言っているのは君の仲間だもんね。勝手に召喚してこき使う。最低だね人間って。」

シユンと肩を落とすケルンにヴァンは少し驚いたようだ。

「いや、俺は別にいいぜ？人間は弱いから使い魔がいねえとやっていけねんだろ。それに使い魔も使い魔で人間から相応の見返りでも貰ってるみてーだしな？」

「そっただけど…」

「なら気にすんなってー！お前は人間、だから使い魔が必要！いちいち悩んでたら禿げるぜー？」

「…ありがとうヴァン。」

一方マイケルはヴァン達が話しているうちに魔方陣を書き上げたらしく、額の汗を拭い、手に付いたチョークの粉をパンパンとはいた。た。

「完成だ。誰か先に召喚してもいいって奴挙手しろ。」

すると、ヴァンを含む数名の生徒を除いた生徒全員が手をサツと上げる。

使い魔召喚は人間の生徒ならばずっと懂れていたので無理はない。

「よし、よし。皆やる気だな。良い事だ。」

マイケルは揉み手をしながら誰を最初にしようかと生徒を一人一人見ていったが、手を挙げずにポケットとしているヴァンに目を止めた。

「お前は召喚をやりたくないのか？」

と、訝しげに尋ねる。

それに対し、ヴァンは困ったように腕を組んだ。

「俺は悪魔だ。使い魔なんかいらねー。」

マイケルの眉毛が吊り上がった。ついでに鼻息も荒くなる。

「悪魔、だと？」

「……ほう、なるほどな。」

なるほど、なるほど……と言いながらしきりに頷くマイケル。

「ではお前はこの授業を見学……でいいのだね？」

「ま、そういう事だ。」

「よろしい。」

……では、ケルン＝ピン。最初に召喚をやりなさい。」

その後は順調に召喚は進んでいった。使い魔召喚の方法は一人ずつ魔方阵の前に立ち、呪文を唱えて魔力を流し込む。魔方阵から青や赤など人によって違う光が溢れだし、次の瞬間魔方阵の中に個性豊かな魔物がいて、それらと契約するだけ。

ちなみにケルンは、見た目可愛らしい黒猫。ジャックリーはとぐろを巻いた大蛇だった。

人間界にいるただの動物だと思っ者がいるが、人間界にいる動物と決定的に違う点が三つある。

一つ目は人語を解すること。

二つ目は変身できること。

三つ目は当然、魔力を持っていることだ。

変身すると言っても、人間の姿になるだけでいろんな動物になれるという訳ではない。そんな都合の良い使い魔がいたら見てみたい。

ヴァンは何もする事がなく、使い魔に目を輝かせる生徒達を欠伸をしながら眺めていた。

暇すぎる。

窓から外を見ると、外で走り回らないと勿体ないくらいの天気だ。

「お…ヴァ…」

何か聞こえる。空耳？

「…い…ん」

まただ。耳か？俺の耳がおかしいのか？

「おいイイ！！ヴァンん！！」

「うるせええーっ！！」

耳元で叫ぶなァー！！！！」

ドカツ！

ヴァンの強烈なパンチで吹っ飛んだソレは教室の壁にぶつかり、ズルズルと床に落ちた。

「あー！ガーグー！」

どこ行つてたんだお前ーッ！！？」

壁に叩き付けられたのはガーゴイルのガーグだった。今では元の大
きさに戻って床でヒクヒクしている。

幸い、クラスメイトが使い魔を召喚する際におこる大きな音や興奮
した叫び声のおかげでヴァン達のやり取りに気付く者はいなかった。

…ただ一人を除いて。

クイクイツとヴァンのシャツが引つ張られる。

ヴァンの後ろに立っていたのは、

「またガーゴイルと騒ぎを起こす気？」

とばかりにしかめっ面をしたベルだった。

彼女は肩にカラスをとめている。どうやらこのカラスがベルの使い
魔になった魔物なのだろう。

「何の用だア？俺はもう騒ぎなんて起こす気はねーぜ。それと、ジ
ヤックリーに告白したいから協力してっという願いならゴメンだ。
めんどくせえ。」

ヴァンは白目を剥いているガーグから目を放さずに言った。その言
葉にベルは頬をプクツと膨らます。

「だから！違うつて言ってるでしょっ！？」

…これ返しに来たの！」

バサツと頭に被せられたのは黒い男子用のブレザー。もしかしくても昨日ヴァンがベルに掛けてあげたアレだ。

「コレ…」

「ソレ、汚れてなかったけど一応洗つといたから！感謝しなさいよね馬鹿！」

そう言うや、踵を返して立ち去ろうとしたベルの腕を咄嗟に掴んだ。

「ベル！」

「？」

…何よ。」

訝しげな表情のベル。

「や、お礼を言いたくてよ…ありがとな。」

そう言つてヴァンは笑顔を見せた。

ベルはぼーっとそれを見つめていたが、使い魔のカラスが一声カアと鳴くとハツとしたようにその場を離れて行った。

「その手には乗らないから！」

という謎な一言を残して。

「何言つてんだアイツ？」

教室のヴァンから離れた位置に落ち着くベルを見てポツンと呟くヴァン。数秒遅れて、

「う……いてえなヴァン！思いっきり殴りやがって！昇天するところだつたぞ！？」

ガーグが目覚めた。

「あのな、俺の耳元で叫んだのは誰だ？トイレを俺と壊したのは誰だ？トイレの弁償代を俺一人に任せたのは誰だ？」

「オレしかないじゃん！」

「胸張るな馬鹿野郎！」

ポコツとガーグの頭が殴られる。

「痛い！」

「何しに来たんだー？
ノコノコとオ！！」

「や、ごめんつてえ！
指鳴らすな怖い！」

会いに来たのは逃げたお詫びとしていい事を思い付いたから！」

「……いいー」

ヴァンが不審そうに聞き返した言葉は教室から発生した大きな歓声によってかき消された。

なんとタイミングの悪い。

何事かと歓声の原因を見てみると、クラスの視線を独り占めしていたのはなんとシュメールとその使い魔だった。

シュメールの掌には白い翼の生えたモルモット。モウスルと言う魔界では活火山に住む事で有名な生き物だ。

生徒達が歓声を上げたのはその容姿の可愛さからだろう。

拳動不信に辺りを黒いつぶらな目で見回し、シュメールの掌にうずくまる様子は確かに可愛い。

ああ、そんな事はどうでもいい、とヴァンは頭を振ってモウスルから目を逸らした。

「いい事って何なんだ？」

「オレが淫魔王様に許婚の話を考え直して貰えるように頼み込んでやるって事。」

自信無さげなその言葉はガーク自身、考え直させれる訳がないと言っているようなものだった。

教室の片隅でガーゴイルが密かに姿を消した。

それを見届けたヴァンはふうっと息を吐き出し、壁に寄り掛かって教室の様子を確認する。

もうクラスの殆どの召喚を終えたようだ。

それぞれ使い魔と和気あいあいとコミュニケーションを取っている、が。召喚術の担当の人気キャラクターことマイケルは名簿と生徒たちとで視線を行ったり来たりさせていた。

「今日はフリリップ・ショックスは来てないのかね？職員室に連絡も来てないようだが…誰か知っているか？」

あ、やべー。

ヴァンのこめかみを冷や汗が伝った。

昨日性格変えて寮の外に放り出したんだっけ？

まあ、いい。知らねーとお！

ふとベルと視線が交差した。

ヴァンを疑っている様な目付き。ヴァンは、それでも俺はやってないとはかりに澄した顔で対抗してみたが、それが却ってベルの疑いを強めたらしい。

ヴァンに睨みを効かせつつ生徒達を掻き分け、肩に使い魔をのせて

こちらにやって来る様子は鳥肌物だ。鬼だ。いいえ、阿修羅です。

バタアン！！

ヴァンの危機を救うかのようなグットタイミングで教室の扉が勢い良く開かれた。

何だ何よとクラスが注目する中、元氣良く登場したのは――

「先生さんがボクのコト呼んでいるかと存じましてネ！トレイシーチャンのフィギュアと遊ぶのを中断して参上つかまつたのだ！」

指紋だらけの黒斑眼鏡をクイツと上げる動作が何とも印象的。七三に分けられた前髪がとってもクール。

愛と正義、そして二次元に恋する少年にすっかり変わってしまった、フィリップが立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7112i/>

人間界逃走の果てに

2010年10月21日20時54分発行